年報 2020

Vol.13

医療法人財団　華林会

村上華林堂病院

KARINDOH

巻頭言

医療法人財団　華林会
村上華林堂病院

理事長　菊池仁志

2020年度の村上華林堂病院の年報をお届けさせていただきます。

2020年度は、新型コロナウイルスの流行に悩まされ続けた1年間でありました。2020年2月ごろより始まった新型コロナウイルスの世界的流行は止むことなく、日本国内では、緊急事態宣言が発令され、新しい生活様式が唱えられ、世界の動きが止まってしまいました。世界の交流が途絶える中、それぞれの国ではそれぞれの生活様式を模索し、内向きながらも何とか国を支えることに力を注いでいます。同じ感染症の流行に対しても、完全管理する国家もあれば、自由意思に任せて自然免疫の獲得を目指す国家もあり、政治体制により感染症対策が顕著に変わってくるのは興味深い事ではありました。「国家体制」を重んじるのか、「個の人権」を重んじるのか。ある意味、「国家」と言うものを考えるうえで非常に貴重な機会であったと思います。

日本の医療の世界でも、これまで考えられてきた診療とは全く違った発想が求められました。大規模感染症の流行を経験したことのない日本においては、その医療体制の脆弱性が露わになったことは否めません。各地に新型コロナ専門病院の設置は望まれるところではありましたが、現制度では強制力はなく、政府主導で物事を進めることがいかに困難であるかが明らかになりました。ただ、日本人は戦時中より個を殺して集団迎合する傾向は強く、マスク装着率はほぼ100%に近く、ワクチン接種に関しても出遅れにもかかわらず、瞬く間に他国の接種率を上回るほどになっています。このような特性を良い方向に持っていければ、新型コロナに打ち勝てる日も近いかもしれません。

2020年度、村上華林堂病院では、パンデミックの中での診療という、これまでにない診療体制を強いられることとなりました。しかしながら、病院の基本姿勢には変わりなく、地域の在宅療養支援病院として「病む人を癒す」気持ちをもって日々の診療に取り組んでいます。2021年度も新型コロナウイルスの流行は止むことなく続いています。これからもウイルスとの共存が大きな課題として続いていくことと思います。

新型コロナウイルス禍のなかではありますが、怯むことなく地域医療のために尽力してまいりたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

巻頭言 2

目　次

病院長挨拶 5
病院概要 .....
- 沿革
- 施設概要
- 組織図

統計資料 .....
- 外来患者数　入院患者数
  紹介患者数

診療科案内 6
- 総合診療科内科 6
- 血液・腫瘍内科 7
- 脳神経内科 8
- 循環器内科 10
- 緩和ケア科 13
- 呼吸器内科 15
- 消化器内科 18
- 整形外科 20
- 在宅診療部　在宅診療科 21
- 健康増進・糖尿病センター 23
- 腎臓内科・血液浄化療法センター 25
- 眼科・アイセンター 27
- 健康管理センター 29

医療技術部 30
- 薬剤科 30
- 臨床工学科 31
- 臨床検査科 33
- 栄養管理科 35
- リハビリテーション科 36
- 放射線科 38

看護部 39
- 看護部 39
- ２階北病棟 40
- ２階南病棟 42
- ３階病棟 44
- ４階病棟 45
- 緩和ケア病棟 46
- 中央材料室・手術室 47
- 外来 49
- 総合相談室 50

在宅療養部 …… 51
- 訪問看護ステーション …… 51
- 居宅介護支援事業所 …… 52
- 訪問リハビリテーション …… 53
- 通所リハビリテーション（デイケア） …… 55

事務部 …… 57
- 総務課 …… 57
- 医事課 …… 58
- 地域連携室 …… 59

委員会活動 …… 60
- 医療安全管理委員会 …… 60
- 転倒・転落防止対策委員会 …… 64
- 指差し呼称委員会 …… 65
- 院内感染対策委員会 …… 66
- 院内教育委員会 …… 68
- サービス向上委員会 …… 69
- ＮＳＴ兼栄養管理委員会 …… 70
- 褥瘡対策委員会 …… 71
- 認知症ケアチーム …… 72
- 地域振興委員会 …… 73

サービス付き高齢者向け住宅かりん …… 74
サービス付き高齢者向け住宅かりん、訪問介護事業、通所介護事業所

業績 …… 76
- ・学会・研究発表・講演等 …… 76
- ・論文・著書等 …… 78

TQM 活動 …… 79

病院長挨拶

医療法人財団　華林会
村上華林堂病院

病院長　司城　博志

今年度も年間の病院活動を総合的にまとめた病院年報を発刊することができました。昨年度からは、PDF ファイルとして病院ホームページ上で随時閲覧していただける形式としました。当院の情報をより分かりやすく提供し、ホームページの病院案内情報と整合性を持たせ、総合的な情報伝達力を強化することが目的です。

今年は新型コロナ感染症に大きく翻弄された 1 年間でした。世界と我が国は新型コロナウイルス感染症で今までに経験したことのない社会、医療状況の中に置かれています。強固な院内感染対策を実施し、自院の医療提供体制を維持することが今年度の最重要課題と考え、病院目標の最上位に「新型コロナウイルス対策を整備し、病院組織と地域医療体制を堅持する」を挙げて、職員全員一丸となって感染防御に取り組みました。幸い、職員や患者さんの感染を防ぐことはできましたが、病院の診療機能、地域の病・診連携、病・病連携、医療と介護の連携体制は甚大な被害を受けました。

新型コロナ感染症は地域における当院の役割について改めて考え直す機会を与えてくれたとも言えます。地域における当院の基本的な役割は、近隣の医療・介護・福祉施設と連携し、地域の高齢者が生活圏内で暮らし続けていくことを入院設備のある病院として支援することです（地域包括ケアシステムを支える病院）。これからは、新型コロナウイルス感染症の感染防御と通常の医療機能提供体制を両立させること、コロナ禍においても、これまでと同様に地域の医療・介護施設との連携体制を継続して維持できることが喫緊の課題だと考えます。

これからも地域の方々と共に歩んでいく病院、安心感を提供できる病院、患者さんとご家族、近隣の医療・介護・福祉施設の方々が気持ちよく利用できる病院を目指してゆきたいと思います。令和 3 年度は、病院目標に「新型コロナウイルス対策を整備し、病院組織と地域医療体制を堅持する」に加えて「感染対策を継続し、病院機能を回復し、活性化する」を挙げて、新型コロナウイルス感染症対策の徹底に努めていく所存です。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

総合診療科内科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

総合診療科内科部長　　柴田　隆夫　（総合内科専門医、病院総合診療学会認定医）

内科は、１８名の常勤医師・１１名の非常勤医師で診療を行っており、新患総合外来、各専門外来、検査、入院治療を行っております。当院の特徴としては、地域に根差した診療を主体として、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、血液内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科の主要専門医がそろい、様々な疾患の患者様に対応させていただいております。末期腎不全や悪性腫瘍の患者さんも増えてきております。また、平成２７年度からは、内科が中心となり新たに総合診療科が新設され、全人的医療を通じて地域における当院の役割を果たし、近隣医療機関や施設、地域の皆さんとの連携を大切にして、より良い医療を提供するべく努力していく所存です。

（柴田　隆夫）

2. 臨床実績

2020 年度　主な内科疾患入院患者（延べ人数）	
症例別入院患者数	総計 1363 名
循環器内科疾患	150 名
消化器内科疾患	135 名
神経内科疾患	471 名
呼吸器内科疾患	126 名
血液内科疾患	116 名
悪性新生物疾患	85 名
内分泌・代謝疾患	81 名
腎・泌尿器疾患	83 名
その他	116 名

血液・腫瘍内科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

血液腫瘍内科部長　　柴田　隆夫
非常勤医師　　高松　泰（福岡大学病院　腫瘍・血液・感染症内科教授）

2. 臨床実績

年間疾患診療　(2020/4/1-2021/3/31)	
血液悪性疾患(113 例)	（うち入院 61 例）
１．　悪性リンパ腫	51 (18) 例
２．　多発性骨髄腫	15 (12) 例
３．　急性骨髄性白血病	10 (10) 例
４．　急性リンパ性白血病	1 (1)　例
５．　成人 T 細胞性白血病/リンパ腫	9 (3)　例
６．　骨髄異形成症候群	21 (16) 例
７．　慢性骨髄性白血病	3 (0)　例
８．　慢性骨髄単球性白血病	1 (1)　例
９．　慢性リンパ性白血病	1 (0)　例
１０．　原発性マクログロブリン血症	1 (0)　例
血液良性疾患(12 例)	（うち入院 2 例）
１．再生不良性貧血	4 (1)　例
２．特発性血小板減少性紫斑病	5 (1)　例
３．血管性紫斑病	1 (0)　例
４．特発性赤芽球癆	2 (0)　例

3. 1 年間の活動と今後の展望

当院では比較的高齢の血液悪性疾患の方が多く、活動度に支障をきたしていることが多いため、入院して専門的な治療を行いながらリハビリテーションを進めていき、活動性に改善が得られれば外来化学療法に訪問看護、訪問診療などを活用していただき在宅療養までバックアップし、合併症などで治療の必要が生じたときにはいつでも緊急入院していただける態勢を整えています。また難治、再発の血液悪性疾患や固形腫瘍の方では、緩和的化学療法や疼痛コントロールを中心とした緩和医療にも重点をおき、プライマリーケアーも含めてトータルライフケアのできる診療部門を目指して医療スタッフがチームを組んで取り組んでいます。

（柴田　隆夫）

脳神経内科

1.　スタッフ紹介（2020 年 4 月 1 日から 2021 年 3 月 31 日まで）

理事長	菊池仁志
脳神経センター長	山田　猛
医師	濱里彩子（2021 年 1 月 31 日まで）
	籠田早織
	古田興之助（2021 年 2 月 1 日から）
兼任医師（在宅診療部）	田代博史
その他	非常勤医師

2.　臨床実績

2020 年度　神経系疾患（2020 年 4 月～2021 年 3 月退院患者）	
パーキンソン病（含：分類不能症候群）	91
多系統萎縮症	66
筋萎縮性側索硬化症/原発性側索硬化症	36
大脳皮質基底核変性症	27
脊髄小脳変性症	25
認知症	23
進行性核上性麻痺	21
多発性硬化症/視神経脊髄炎	14
脳血管障害	9
ジストニア	4
めまい症	4
重症筋無力症	3
脳・脊髄腫瘍	3
脳症	3
脊髄症	3
筋疾患	2
プリオン病	2
心因性疾患	2
その他	8
計	346

3.　1 年間の活動と今後の展望

当院の脳神経内科は、1982 年の開院当初より診療を行ってきました。福岡市の脳神経内科医療は東区の九州大学病院と城南区の福岡大学病院が高度専門医療を担っています。脳卒中のような急性期診療を担う総合病院は中央区と隣接する南区、早良区、東区に集中しており、西区では白十字病院があります。パーキンソン病、パーキンソン症候群、筋萎縮性側索硬化症などの神経難病は、慢性期の医療を長期にわたり提供する必要があり、基幹的な総合病院では対応しにくく、専門医療機関は未だ乏しい状況です。菊池仁志現理事長が赴任してからは、神経難

病の専門病院として、患者・家族に質の高い慢性期医療を提供してきました。

入院診療実績は、障害者病棟での神経変性疾患患者を主体とし、疾患構成は従来通りで、パーキンソン病およびパーキンソン症候群が多いです。スタッフが増えたこともあり入院患者数は若干増加しています。入院での集中的なリハビリテーションや定期的なレスパイト入院により、在宅療養を支えることができています。新型コロナ禍で受療の手控えが問題となる中、障害者病棟の利用はあまり大きな影響を受けていません。リハビリテーション室とスタッフが充実しており、特にパーキンソン病に特化したLSVT (Lee Silverman Voice Treatment)は患者から高評価を得ています。通院でのリハビリテーションにも対応しています。

神経難病では(嚥下性)肺炎や尿路感染症の合併が多く、現状では新型コロナ感染を鑑別する必要があります。発熱患者の対応では、患者さんにご不便をおかけしましたが、抗原検査とPCR検査の導入により、入院受け入れがスムーズにできるようになりました。診療以外の部外者の訪問制限もあり、九州大学医学部生の見学実習が実施できませんでしたが、新型コロナワクチンの普及により学生実習は再開できるようになります。当院では、大学病院や急性期病院では経験できない慢性期や進行期の神経難病の療養について学ぶことができます。

遺伝子やバイオマーカー検査といった先進医療を適応することは困難ですが、神経難病の治験やケアの向上に役立つ臨床研究は進めていきたいと考えています。脳神経内科専門医療機関の少ない福岡市西部～糸島地区において、当院は脳神経内科の地域医療を近隣の医療機関とともに支えていきます。

（山田　猛）

循環器内科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

副院長・循環器内科部長　　星野　史博
非常勤医師　　井手元　良彰（福岡大学病院　循環器内科）
非常勤医師　　髙田　耕平　（福岡大学病院　循環器内科）
非常勤医師　　桑野　孝志　（福岡大学病院　循環器内科）
非常勤医師　　清水　真行　（福岡大学病院　心臓血管外科）
非常勤医師　　和田　秀一　（福岡大学病院　心臓血管外科教授）

2. 臨床実績

循環器専門研修関連施設および高血圧学会認定研修施設を維持し，循環器専門医 1 名と循環器内科専門医 2 名（非常勤）、心臓血管外科医 2 名（非常勤）と更に昨年よりも 2 名の非常勤医師の増員にて、外来診療および病棟業務を継続しました。心臓リハビリテーション（以下、心リハ）は、平成 25 年 1 月から心大血管疾患リハビリテーション科 I(心 I)の施設基準を維持しています。

外来：

患者数は総数 6586 名（前年 7871）（月平均の平均：549（656）名、非常勤医師を含む）であり前年と比較し大きく減少に転じています（表 1)。心臓リハビリテーション対象者も 17～32 名/月とこちらも減少、非常勤医師（福大循環器内科および心臓血管外科）の増員もあり紹介数も増加したにもかかわらず稼働低下に至った背景に COVID-19 感染に伴う患者さまの受診控えが強く影響したと推察しています。感染対策に病院をあげて一層の努力を行いつつ、今後も更なる増患にも対応できるようスタッフ一同努力して参ります。

入院：

循環器疾患のみの入院数は、150 名（前年 117 名）と増加し、外来患者数の減少と乖離しており、これには非常勤医師の増員や近隣医療施設からの紹介が増えたことが要因と考えます。

内訳として昨年と同様に高齢者の心不全（HFpEF）再発症例と術後もしくは急性期治療後の心リハ対象者の転院が圧倒的に多く、心不全の基礎疾患としては不整脈や左室拡張障害、弁膜症、慢性腎不全の増悪に伴うものでした（表 2)。入院加療を必要とした心不全症例は 69 名（前年 52 名）であり、入院退院を繰り返す高齢者の心不全患者が明らかに増加していました。その背景には、COVID-19 の感染を警戒した患者さまが自宅に篭り、リハビリや受診控えとなりフレイルに移行する、適切なタイミングでの受診が出来なくなった、他者とのコミュニケーションが出来ずに抑うつ状態に至る、などの特殊な生活環境下にあった影響が大きいと拝察されます。外来での心リハも COVISD-19 感染の対策にて縮小せざるを得ず、①EBM の示す通り患者の体力向上やうつなどの精神面でのサポートができずに悪循環となったこと、 ②今まで可能であった 1～2 回/週の心リハが出来ずに問題のある症例において細やかな投薬調整や栄養･服薬指導、患者教育が定期的に行えず早期の心不全治療介入が出来なかったことなどが挙げられます。

尚、入院および外来の心リハ対象者は、入院 246 名、外来 98 名（前年合計 613 名）/年と大きく下回る状況（表 3）であり、こちらも本年の特殊な状況を如実に示す結果となりました。

転院での受け入れ症例は、術後もしくは急性期治療後の心リハ対象者、もしくは緩和ケアを見据えた治療抵抗性心不全患者の転院（福岡大学病院ハートセンターや福岡記念病院、九州医療センター心臓血管外科など）が大多数を占め、自宅退院が困難な症例に際しては当院の大きな特徴である在宅診療や訪問看護への移行や近隣の療養型病床への転院や当院地域連携室を介した流れも COVID-19 の流行下で大きな制限があり苦慮する症例も多々ありました。

検査：

外来数の減少と同じく昨年より明らかに減少しておりますが（表 4)、検査技師の技術向上に裏付けられた質の向上は継続できており今後も安定した実績を堅持する体制が出来ています。

手術：

ペースメーカー移植術の対象となる症例（電池交換術を含む）は 33 件（前年 33 件）と症例数に変わりありませんでした（表 5)。当科ではクリーンルーム下での PMI 施行ですので術後感染などの complication は殆どなく、今後も積極的にペースメーカー移植術に取り組んで参ります。

表１　2020 年度　循環器科外来延べ患者数

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	**合計**	平均
518	489	515	608	540	563	620	549	561	558	470	595	**6586**	548.8

表２　2020 年度　循環器系疾患入院患者数

心不全	69
ペースメーカー電池消耗	17
房室ブロック	8
心房細動	7
高血圧症	7
大動脈瘤及び解離	5
大動脈弁狭窄症	5
下肢閉寒性動脈硬化症	4
洞不全症候群	3
心筋虚血	3
硬膜下血腫	3
狭心症	3
その他	16
総　数	150 名

表３　2020 年度　心大血管算定患者数（件数）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
外来	16	17	20	20	22	21	25	24	21	17	20	23
入院	1	4	10	6	5	11	8	6	5	12	11	8

表４　2020 年度　検査件数	
心エコー	889 件
ＡＢＰＭ	19 件
ＣＡＶＩ	374 件
経食道エコー	6 件
運動負荷心電図	30 件
ホルター心電図	238 件
中心血圧	179 件

表５　2020 年度　ペースメーカー手術件数	
ペースメーカー移植術	16 例
ペースメーカー交換術	17 例
体外ペースメーキング	3 例

3. １年間の活動と今後の展望

５月に COVID-19 の感染が確認された以降、当院での通常診療も外来や入院からの転院調整においても制限されてしまい非常に患者さまには迷惑をかけた１年となりました。

非常勤医師（循環器内科、心臓血管外科）増員に伴う専門外来の拡充ができており、COVID-19 の流行が落ち着けば今まで以上に他科との連帯はもちろんのこと、福岡大学病院などの高次医療機関との密なる連携，近隣の療養型病床を有する医療機関や施設などとのスムーズな連携を確立できる体制造りを引き継ぎ行う所存です。

（星野　史博）

緩和ケア科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

緩和ケア科部長、病棟医長　　司城　博志

医　師　　柴田　隆夫、工並直子

2. 臨床実績

昨年１年間の「緩和ケア病棟」の入院数は 200 名（男性 111 名、女性 89 名）、入院時の年齢は 47 歳から 95 歳で平均年齢は 73.5 歳でした。悪性腫瘍の種類は例年とほぼ同じく、肺癌、胃癌、膵癌などが主でした（表１）。患者さんの地区別の入院状況でも例年と同様、福岡市西区、早良区、糸島市で全体の 89.0%を占めていました。これは 7 年前の 77%に比べて増加しており、「緩和ケア病棟」が患者さんやご家族の生活基盤がある地域に密着した施設であることを示しています。（表２）。「緩和ケア外来」には、昨年度 127 名の患者さんを紹介していただきました。昨年度の緩和ケア病棟在宅復帰率は 18.6%でした。

表 1：ホスピス・緩和ケア病棟の入院患者の原疾患別分類	
肺癌	37 例
食道・胃癌	12 例
大腸・直腸・肛門癌	27 例
肝・胆・膵癌	39 例
乳癌	9 例
その他（子宮癌、卵巣癌、頭頸部癌	76 例

表 2：　ホスピス・緩和ケア病棟の地域別入院状況	
福岡市西区	45.5%
福岡市早良区	42.0%
糸島地区	1.5%
その他の福岡市	8.5%
その他	2.5%

3. １年間の活動と今後の展望

新型コロナ感染症が緩和ケア病棟の運営にも大きな影響を与えた１年でした。感染防御の観点から、家族の面会、付き添い、患者さんの外出・外泊の制限を余儀なくされました。残り時間の限られた患者さんとその家族にとって、家族として過ごす時間が、かけがえのない大切なものであることを改めて痛感させられました。コロナ禍でもできるだけ面会時間を確保し、感染防御と患者さん・家族のニーズに応えることを両立させる努力をしてゆきたいと思います。さて、コロナ禍であらためて患者さん・家族のニーズ、地域から緩和ケア病棟へのニーズ、と緩和ケア病棟の役割について考えさせられた年でもありました。緩和ケア病棟の役割も地域や時代のニーズによって変わってゆきます。緩和ケア病棟へのニーズは、従来の丁寧な見取りを

提供する病棟から、困難な状況を生きている患者さんとその家族に伴走し、エンド・オブ・ライフケアを提供する病棟へと変化してきています。緩和ケア病棟を利用される多くの人は、病気が治らないのは仕方がないが、最期の時を迎えるときまで、毎日を安心して自分らしく普通に生きてゆきたいと希望されています。自分と共に伴走しながら、何かあった時に援助してくれる医療者を切実に求めています。
これからも、訪問看護、訪問診療との協力・補完体制の充実、親切で細やかな対応など、患者さんとご家族、近隣の医療機関の皆様方のご要望にしっかり応えられるように努力してゆきたいと思います。

（司城 博志）

呼吸器内科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

呼吸器内科部長　　有冨　貴道

非常勤医師　　串間　尚子（福岡大学筑紫病院　呼吸器内科）

2. 2020 年度呼吸器疾患

疾患名		入院	外来
かぜ症候群			**1**
	かぜ（感冒）	358	0
	上気道炎	279	1
	インフルエンザ	1	0
感染症疾患			**255**
	肺結核症（陳旧性を含む）	72	11
肺炎	細菌性・肺化膿性	88	16
	（マイコプラズマを含む）	3	0
	非細菌性	432	162
	（誤嚥性を含む）	107	66
閉塞性肺疾患			**51**
	気管支喘息	670	19
	慢性閉塞性肺疾患（COPD）	149	22
	慢性気管支炎（非閉塞性）	372	10
拡張、嚢胞性肺疾患			**6**
	気管支拡張症	92	2
	無気肺・嚢胞など	18	4
腫瘍性肺疾患			**48**
	肺がん（原発性・転移性）	178	48
	縦隔腫瘍	6	0
肺線維化疾患			**8**
	間質性肺炎	81	8
	サルコイドーシス	4	0
胸膜疾患			**40**
	結核性胸膜炎	1	0
	癌性胸膜炎	6	5
	胸水	151	24
	膿胸	3	3
	自然気胸	13	8

肺循環障害			**0**
	肺水腫	8	0
換気異常			**13**
	睡眠時無呼吸症候群	109	13
	睡眠時呼吸障害	0	0
	過換気症候群	9	0
	合計	**422 例**	

3. 1年間の活動と今後の展望

【診療科案内】

呼吸器内科の外来診療は専門医にて月曜日、火曜日の午前中、更に木曜日、金曜日午後に有冨が担当（土曜日も第１，第３午前中)、また福岡大学病院から串間尚子先生にて木曜日午前中に呼吸器疾患に関して診療行い、更に健康診断の要精密の依頼や精査も行っています。更に睡眠時無呼吸症候群についてはCPAP（シーパップ：持続陽圧呼吸療法）装着患者の日常管理を特に水曜日に行い、新患も午前中に相談、診療にあたっています。

2020年はCOVID-19がパンデミックを起こし世界的危機状況に覆われました。当初は院内では高齢者対応で行っていましたが、ワクチン接種後は次第に若年者にも発症があり、爆発的に罹患者も増えてきています。外来、入院と今後も苦悩の日々が待ち構えています。COVID-19 は風邪症状が一般ですが、中等症、重症となると致死的状態になるのは肺に生じる重症肺炎の管理です。当院はそこまでの重症は当然ながら対応できる病院にお願いしていますので、それに至る呼吸状態や胸部CTには呼吸器内科としても目を光らせています。

さて2020年度の外来･入院患者数を表に示しています。今年度は呼吸器疾患に関して2019年度より患者数が減少していますが、減少の一つにはインフルエンザが激減したことです。全国的にコロナ対応でマスクの装着や、対人関係を断ったことが大きな要因でしょう。しかしインフルエンザのパンデミックは数年周期で発生していますので今年の冬もまた注意が必要です。更にコロナで医療機関への受診が敬遠されて患者数は全体的に減少していると思います。その中で昨年と比較し特に肺炎が外来や入院にて半減しています。発熱の対応等でこれも近医や施設からの紹介が減ったのでしょうか。患者数にあまり変化の見られないのが閉塞性肺疾患の気管支喘息が外来では多く見られ、慢性閉塞性肺疾患と合わせ近医での当院の呼吸器専門外来が周知されていることや、自覚症にてコロナも心配なのでしょうか、変わらず来院されています。多疾患も昨年とほぼ入院では減少しています。これらコロナ後も踏まえ医療の在り方を考えるきっかけになれば幸いです。

【方向性と展望】

コロナ対策の現状踏まえ当院の置かれているこの地区での施設体系や、現実の高齢化社会へ移行中ということで老人に多い疾患を診療し、よりよい治療のための呼吸器疾患に特

化した患者症例数を増やしていき、地域包括的な診断・治療に協力していきたいと考えます。また最近増えてきたのが健康診断の胸部所見にて精査依頼が多くなっており、肺がん鑑別はもちろん、結果として異常なくとも今後も引き続き医療相談に乗っていきたいと思います。特に 1.慢性閉塞性肺疾患（COPD）と気管支喘息、2.肺癌、3.睡眠時無呼吸症候群(SAS)について他診療科や近医からの相談・治療に携われるよう努力していきたいと思います。

また一般外来では咳嗽・喀痰の出現、呼吸困難、胸痛等に伴う発熱について診療や相談に乗りたいと思います。

（有冨貴道）

消化器内科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

消化器内科部長　　小山　洋一
医　師　　司城　博志
医　師　　横山　昌典
非常勤医師　　縄田　智子（福岡大学病院　消化器内科）

2. 臨床実績

2020 年度消化器内科実績	
【肝疾患】	
C 型肝炎に対するインターフェロンフリー療法	約 10 例
B 型肝炎に対する核酸アナログ製剤	約 22 例
【内視鏡】	
上部消化管内視鏡検査	850 例
下部消化管内視鏡検査	213 例
内視鏡的止血術	1 例
内視鏡的大腸ポリープ切除術	28 例
内視鏡的食道静脈瘤結紮術	1 例
内視鏡的胃瘻造設術	14 例
内視鏡的胃物除去	1 例
計	1107 例

3. 1 年間の活動と今後の展望

消化器内科は 3 人の常勤医師と 1 名の非常勤医師で、消化器疾患全般(消化管、肝、胆、膵)の診断・治療に全力をあげて取り組んでいます。

消化管は食道・胃・大腸の癌をＸ線・内視鏡で診断し、ポリープや早期がんは内視鏡的切除を行っています。消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術も施行しています。なお、平成 21 年に受けた日本消化器内視鏡学会関連施設の認定は、以後も継続して更新しております。また最近は、近隣の病院や施設からのご依頼による内視鏡的胃瘻造設術や胃瘻チューブの交換も増加してきています。

肝臓疾患は平成 21 年に肝疾患治療専門医療機関の認定を獲得し、平成 23 年より日本肝臓学会関連施設の認定も受けました。C 型慢性肝炎に対してのインターフェロンフリー療法、Ｂ型肝炎に対するインターフェロン療法や核酸アナログ製剤投与、自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変に対しての免疫療法、原因不明の肝障害に対しての肝生検などを肝臓専門医が行っています。非代償性肝硬変症の難治性腹水に対し、腹水濃縮濾過再静注法(CART)も積極的に行い、患者様の ADL 改善に努めています。肝細胞がんは、腹部超音波検査・CT で診断し、早期肝細胞

がんには、ラジオ波焼灼術も施行可能です。食道静脈瘤に対しては、内視鏡的結紮術と硬化療法を行い、緊急吐血症例にも対応しています。また、現在 4 名の肝炎コーディネーターにより、肝疾患患者様への積極的な関与と管理を行っています。

胆・膵分野は画像診断で、がんの早期発見、閉塞性黄疸に対する経十二指腸的胆管ドレナージ術、胆管内の結石除去など、近隣の外科病院と連携して治療を行っています。

進行消化器がんで手術治療が不可能な症例も、抗がん剤治療を行い、更に進行した症例では緩和ケア病棟での加療を行い、包括的な医療を提供出来るように努力しています。

（小山 洋一）

整形外科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

整形外科部長　　蒲原　光義
非常勤医師　　1 名

2. 臨床実績

2020 年度　整形外科患者数

	外来治療人数	入院治療人数
4 月	448	10
5 月	412	4
6 月	540	6
7 月	587	5
8 月	536	3
9 月	568	4
10 月	590	6
11 月	519	9
12 月	556	9
1 月	496	10
2 月	518	6
3 月	537	4
合　計	6307	76

3. 1 年間の活動と今後の展望

外来診療は主に近隣にお住まいの方、登録医の先生からのご紹介、他科外来・入院併診・周辺老健施設などからのご紹介となっています。腰痛、膝関節痛等体幹・四肢関節の変性に起因した疾患の治療、また、骨折・筋腱断裂など、外傷の近隣総合病院への紹介もさせて頂いています。CT・MRI 検査も比較的早期に施行できて診断の有力なツールとなっています。
骨粗鬆症を有するご高齢な方がちょっとした転倒などで骨折し、場合によっては手術や入院を要してしまう股関節部や脊椎部の骨密度測定（DEXA 測定）が保健適応で行えます。

入院患者症例は骨粗鬆症を基盤とした脊椎椎体圧迫骨折、変性疾患である腰部脊柱管窄症を代表とした腰痛、術後のリハビリテーション目的の紹介患者などの症例が多くを占めています。

介護保険を利用しデイケア･デイサービス・近隣施設のショートステイの利用の提案などご家族のご負担を軽減するべくご自宅での生活ができるようにコメディカル共々退院後の生活に向けてご案内を行っています。

登録医の先生を始めとした地域の医療機関、福岡大学病院・国立医療センター等の近隣３次病院とも連携して適切な専門的治療を心がけて行っています。

（蒲原 光義）

在宅診療部　在宅診療科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

在宅療養部長・在宅診療科部長　　田代　博史

土曜日担当医師（隔週）　籠田　早織

当院併設サ高住「かりん」担当医師　　山田　猛 ・工並　直子

当院入院担当医師　　司城　博志・柴田　隆夫

在宅コーディネーター　3 名（看護師 2 名・在宅介護事務 1 名）

2. 臨床実績

看取りの年次推移

	2018 年度 （常勤医 2 名体制）	2019 年度 （常勤医 2 名体制）	2020 年度 （常勤医 1 名体制）
登録総数	187 名 （男 65 名・女 122 名）	183 名 （男 61 名・女 122 名）	171 名 （男 55 名・女 116 名）
死亡総数	58 名	52 名	45 名
病院死亡	21 名 難病： 2 名 癌　：11 名 他　： 8 名	19 名 難病： 6 名 癌　：10 名 他　： 3 名	10 名 難病： 3 名 癌　： 3 名 他　： 4 名
在宅死亡	37 名 難病：11 名 癌　：15 名 他　：11 名	33 名 難病：10 名 癌　：10 名 他　：13 名	35 名 難病： 8 名 癌　：10 名 他　：17 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

2020 年度の診療科構成については、訪問診療常勤医が 1 名、土曜日（隔週）担当医が 1 名、サ高住「かりん」担当医が 2 名となっています。

2020 年度において 1 年間の患者登録延べ総数は 171 名、その中で死亡総数は 45 名（在宅での看取りが 35 名で 77.8%、病院内での看取りが 10 名で 22.2%）でした。患者の登録延べ総数は減少していますが、2020 年 3 月より訪問診療常勤医が 1 名のみになったことが影響しています。医師数減少に伴い当科で対応困難となった事例に関しては、近隣の訪問診療クリニックに依頼することが多くなりました。ただ在宅看取り数に関しては、前年度同様に 30 名以上を維持することができました。

在宅での看取り 35 名の中で、高齢者施設での看取りは 22 名（2019 年度は 17 名）でした。その内訳は当院併設のサ高住「かりん」が 14 名（2019 年度は 12 名）、特別養護老人ホーム「マナハウス」が 6 名、その他の施設が 2 名でした。当科では近隣の高齢者施設での看取りを支援することも重要な役割と考えていますが、結果的に前年度より 5 名の増加となっています。

また当科では九州大学医学部 6 年生の在宅診療実習を定期的に受け入れてきましたが、2020 年度は新型コロナ感染流行に伴い実習受け入れは行っていません。感染状況等改善すれば 2021

年度は学生実習の受け入れを行う方針です。

なお在宅診療科としての基本的な方針（神経難病や末期癌の緩和ケアなど当院に特化した病院機能を支える・近隣の高齢者施設を支援する）は変わることなく、病院として行う在宅医療を今後も継続していきたいと考えています。

（田代 博史）

健康増進・糖尿病センター科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

センター長　小野 順子　（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　吉田 亮子　（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　牟田 芳実　（糖尿病専門医研修専攻医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　江崎 俊介　（糖尿病専門医研修専攻医、日本内科学会認定内科医）
非常勤医師　元永 綾子　（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会認定内科医
内分泌学会認定専門医）
糖尿病療養士　22 名　看護師 13 名、管理栄養士 3 名、薬剤師 2 名
臨床検査技師 3 名、理学療法士 1 名

2. 臨床実績

外来および入院患者内訳

外来	総数	1449 名	
健康増進・糖尿病センター	総数	846 名	
糖尿病		659 名	
健康増進関連		187 名	＊1
一般外来	総数	603 名	
一般新患		388 名	
健康診断		215 名	
入院	総数	337 名	
糖尿病		261 名	*2
その他		76 名	*3

＊1　高血圧、脂質異常症、動脈硬化性疾患、内分泌疾患など
＊2　教育入院教室参加数 35 名
（4－5 月は新型コロナウイルス感染症のため糖尿病教室中止）
他疾患で入院中の患者の血糖コントロール（併診）含む
＊3　健康増進関連、新患外来から入院した呼吸器、消化器、尿路系の急性期疾患、障害者病棟や緩和ケア病棟関連の疾患

3. 1 年間の活動と今後の展望

2014 年に当センターが開設し 7 年目にあたります。本年度も福岡大学内分泌・糖尿病内科からの応援を頂き、看護師・栄養士・薬剤師・臨床検査技師・理学療法士と多職種と連携をとりながら診療に携わって参りました。しかし 2019 年に始まった新型コロナウイルス感染症の度重なる感染拡大に多大な影響を受けました。外来診療では診察、検査ができない電話診療が多くなり、また病棟診療では入院の差し控えがあり、糖尿病教室困難、面会制限による患者さんやご家族への対面、集団での指導が不十分となりました。

感染の流行は 2 年目となり、現時点で収束の兆しがありません。生活環境の変化による食事

療法の乱れ、運動量減少が結果として血糖コントロールの悪化、フレイル・サルコペニアの増加、認知症の進行などをきたし、集団教育も困難な状況下で今後の糖尿病診療はどうあるべきか課題となっています。

最後になりますが、2021 年 4 月より小野順子先生より当センターを引き継ぐこととなりました。常に多職種と共に、また診療科を越え連携をとりながら患者さん一人一人に寄り添った診療に励んでいきたいと思っております。

（吉田 亮子）

腎臓内科・血液浄化療法センター

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

血液浄化療法センター長・腎臓内科部長　　村田　敏晃
看護師長　　1 名
看護師　　8 名
臨床工学技士　　6 名
ケアスタッフ　　1 名

2. 臨床実績

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
外来	1392	3146	3279	4592	5543	6344	6740	7035	6807	6700	6430
入院	197	532	1007	1000	684	793	815	912	1031	1173	1308
延べ人数	1589	3678	4286	5592	6227	7137	7555	7947	7838	7873	7738

図）2010年7月5日から2020年3月31日までの透析患者延べ人数の推移

3. 1 年間の活動

(1) 腎臓内科：

外来での慢性腎臓病（CKD）患者、ステージ G3 a 以上が 58 名で、G3a:20 名（男性 7、女性 14）、G3b:16 名（男性 6、女性 10）、G4:12 名（男性 6、女性 6）、G5:9 名（男性 4、女性 5）（＊糖尿病・内分泌内科，循環器など他科併診も含む）であった。

(2) 血液浄化療法センター：

当センターでは、「安全で質の高い透析療法・看護の提供」に努め、木の素材を生かしたぬくもりがある床と大きな窓のあるフロアで、患者さんの安全で快適な透析療法を提供することを目標としている。透析のシステムとして、逆浸透水処理装置、エンドトキシン捕捉フィルタ、透析溶解装置 DAD などを使用し透析液清浄化を行い、超純粋透析液（エンドトキシン濃度 0.001EU/mL 未満かつ透析液細菌数 0.1cfu/mL 未満）を作製し、配管の繋ぎ目がない PVDF 配管を使用することによって患者さんには非常に清浄化された透析液を供給している。装置は、ブラッドボリューム計が装備されている、多人数用透析装置 6 台と個人用透析装置 22 台を設置し、血液透析（HD）、血液濾過（HF）、限外濾過（ECUM）、血液濾過透析（On-line、Off-line）、AFB への対応が可能。また、必要に応じて血漿交換療法（CART、LDL-A、DFPP、単純血漿交換）なども行っている。体重測定の間違いなどが起こらないように透析通信システム Future Net Ⅱ（日機装社）を使用している。治療に際しては、血液浄化関連専門医（透析専門医・透析指導医・血漿交換専門医資格あり）・透析療法従事職員研修を終了した看護師・臨床工学技士があたり、透析中の急変に備えています。

2020 年度は、新規患者は 11 人、内当院での新規導入患者は 8 人（昨年度 8 名）。内 2 人は、

その後他院へ紹介（西新クリニック、松口胃腸科外科クリニック）。他院で新規導入となり当院紹介となったのは 3 人(福岡大学病院腎臓膠原病内科 2、白十字病院１)。他院で維持透析中の患者 1 人（白十字病院）が紹介外来となった。
2021 年 3 月末時点で、当院透析患者数は 49 人（昨年 51)、内 44 人（昨年 41）は外来透析、5 人（昨年 10）は入院中あった。当院外来患者の転出：1 名は送迎が必要となり、2020 年 11 月に自宅近くの三愛クリニックへ転院。1 名は、2021 年 1 月に福岡大学病院泌尿器科で、妻をドナーとしての生体腎移植が行われ透析を離脱した。
2020 年度の延べ患者数は 7738 人（昨年 7873）で、外来 6430 人（昨年 6700)、入院 1308 人（昨年 1173）で、2019 年度に比べて外来 270 人減（昨年 107)、入院患者 135 人増（昨年 142）で，延べ人数としては 135 人減少（昨年 35 人増加）で、2018 年度以来の減少であった（図)。
他科入院患者は同一患者再入院も含め、眼科 10 人（紹介元：本村内科　2、伊都クリニック 2、賀茂クリニック 2、信愛クリニック 1、いとしま腎クリニック 1、三光クリニック１，当院外来 1)。循環器内科 7 人（紹介元 :福岡大学病院心臓血管外科 3、福岡大学循環器内科１、当院外来 3)。消化器内科 3 人（紹介元：重松クリニック１、信愛クリニック１、三愛クリニック１)。糖尿病・内分泌内科 6 人（紹介元：当院外来５、福岡大学病院糖尿病・内分泌内科 1 名)。腎臓内科 33 人（当院外来 18、福岡大学病院：腎臓・膠原病内科１；形成外科１；整形外科１；心臓血管外科１。三光クリニック 3、済生会福岡総合病院 3、高山病院 2、松口胃腸科・外科医院　1、信愛クリニック 1、重松クリニック 1、古原医院　1 であった。その他、ECUM は 3 人。
2020 年度の死亡患者は 9（昨年 10）人で、他院よりの紹介患者 3 人（大腸癌 1、呼吸器装着状態で家族の意向で透析中止１)、当院外来患者 6 人（心筋梗塞疑い１、本人・家族の意向で透析中止１、肺炎１、肺癌１、脳出血後急性循環不全１、呼吸不全１)。
血漿交換は、腹水濃縮再静注（CART)：延べ 8 回（昨年 18)、同一患者あり。免疫吸着（神経疾患：延べ 18 回＜昨年 12＞)：同一患者で外来治療を定期的に 1 クール 6 回施行。
シャント関連：新規作製 15 人（昨年 15)、PTA13 人（昨年 12)：同一患者あり、であった。
紹介元病院は、福岡大学病院腎臓・膠原病内科循環器内科,心臓血管外科,形成外科,整形外科、白十字病院、三光クリニック、重松クリニック、信愛クリニック、三愛クリニック、高山病院、古原医院、松口胃腸科・外科医院、本村内科、賀茂クリニック、伊都クリニック、いとしま腎クリニック（順不同）であった。

（村田　敏晃）

眼科・アイセンター

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

副院長・アイセンター長　　野下　純世
部　　長　　ファン　ジェーン
医　　師　　下川　亜沙美
非常勤医師　　木下　和泉
看護師　　２名（外来日は応援あり）
視能訓練士　　３名
眼科クラーク　　１名
医師事務　　１名（外来日は２名）

2. 臨床実績

2020 年度　眼科手術症例内訳

	外来	入院	合計
水晶体再建術（白内障手術）	14	645	659
硝子体手術	1	87	88
網膜復位術	0	2	2
緑内障手術	0	45	45
外眼部手術	30	23	53
硝子体注射（※１）	258	19	277
その他	167	70	237
計			**1361**

硝子体注射（※１）	外来	入院
テノン氏嚢内注射	9	1
結膜下注射（片眼）	1	0
硝子体内注射	248	18

3. １年間の活動と今後の展望

【臨床実績と１年間の活動】

コロナ禍の中、患者様の受診控えもあり、例年に比べ手術の件数は減りましたが、感染対策を注力しながら診療を行った１年間でした。手術につきましては、2020 年度は硝子体手術、白内障手術の器械が新しく導入され、よりスムーズに手術が行えるようになり、その他緑内障インプラント手術、外眼部の手術（眼瞼下垂、睫毛内反）、結膜弛緩症と多種多様な治療に対応しました。近年、眼内レンズを入れてから 10 年以上経った患者様の眼内レンズ亜脱臼、脱臼が増えてきており、強膜内固定を行うことが多くなってきました。また加齢黄斑変性症や糖尿病黄斑浮腫、網膜静脈閉塞症に伴う黄斑浮腫に対して、抗 VEGF 薬やトリアムシノロンの硝子体内注射も増えてきております。

また外来は、火、木（午前、午後）、土（午前）、手術は月、水、金（午前、午後）で行っております。火、木、土の外来は、待ち時間軽減のため予約制で行っており、看護師や視能訓練士、医師事務の配置を手厚くすることで、患者様の待ち時間短縮を図り、患者満足度の向上を目指しております。

【今後の展望】

新型コロナ感染を恐れるあまり受診抑制がかかり、患者様の眼の治療が手遅れになっているケースも多々見受けられます。今後も万全の対策を行って、患者様に安心していただけるよう、入院外来共に頑張って参ります。近隣の先生方からも安心してご紹介して頂けますよう、努力して参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（野下 純世）

健康管理センター

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

健康管理センター長　　横山　昌典

事 務 職 員　　1 名

2. 臨床実績

2020 年度健診実績	
企業検診	919 件
協会けんぽ健診	644 件
特定健診	370 件
人間ドック	16 件
合計	1,949 件

その他、福岡市がん検診として、胃がん検診 28 件、大腸がん検診 58 件、前立腺がん検診 26 件がありました

3. 1 年間の活動と今後の展望

健康管理センターは、医師 1 名と事務職員 1 名で健診部門の運営を担当しています。健診運営会議を月 1 回開催し、円滑な体制作りに努めています。また、衛生委員会も併設されており、当院職員の健康管理を行っています。

健診専属医師がいないため、健診患者数を大きく増加させる事は不可能な状態ですが、コロナ渦の中、若干の健診検査数の増加が見られました。新規の依頼などには可能な限り対応しています。

当院では、健診部門と一般診療部門が混在しているため、健診受診者に御迷惑をおかけしているのが現状です。しかし、異常が見られた時に早急かつ円滑に 2 次精査・治療を行える事が可能であり、メリットでもあると考えています。受診者に、わかり易く、有意義な健診となる事を目標にしています。

（横山 昌典）

薬剤科

1.　スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

薬剤師　　6 名（パート 1 名含む）

クラーク　2 名

2.　臨床実績

抗がん剤無菌調製業務　401 件/年

3.　1 年間の活動と今後の展望

本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、臨時の感染委員会を開催したり、感染予防に必要なアルコール消毒等も不足した状況で、代替え等を検討したり通常業務に加えて院内の感染対策に時間を費やした年でもありました。

2020 年度の調剤処方箋枚数は、月平均約 1800 枚、注射処方箋は、月平均約 2200 枚でした。入院患者さんの鑑別件数は、月平均約 180 件、年間 2145 件でした。薬剤科ではできる限り患者さんの持参薬を使用することで、患者様の自己負担の軽減や医療費の削減に貢献することができました。また、これまで抗がん剤の件数は年間平均約 330 件（2019 年度はコロナの影響もあり 272 件）でしたが、本年度は 401 件と薬剤科で抗がん剤無菌調製業務を開始して以降、過去最高の件数となりました。

薬剤科が主体となる委員会において、まずは薬事審議会を定期的に行い、院内採用薬の期限切れの情報を医師に周知し、できるだけ廃棄薬剤とならないよう情報共有を行ったり、約 30 品目のデットストック薬剤を削除しました。また、後発品薬品調剤体制加算 I を算定できるよう医師との後発品医薬品への取組も行ってきました。（2021 年 3 月時点での後発医薬医薬品の割合 78%）次に、医薬品安全管理部会では規定の見直しを行い、委員会を定期的に開催することで医薬品の安全使用のための必要な情報を各部署に情報共有できました。また、医薬品管理マニュアルや医薬品業務手順書の改訂を行い、部署毎の評価になるよう医薬品安全管理業務チェックリストを変更したことで各部署の問題点も把握することができ、対策や改善につなげることができました。

医療安全の面では、同じようなヒヤリハットを引き起こさないよう調剤室のレイアウトを変更し、以前より監査に集中できる環境作りに取り組んだ結果、ヒヤリハットに繋がる事例も昨年度より減少しました。

次年度は、薬剤科の業務効率化も確立し、一般病棟への入院サポートに関与していきながら、入院時に患者さんがどんなお薬を今まで服用していたのか、重複したお薬はないか、医師・看護師と情報共有を共にし、自宅退院される患者さんへの退院指導にも介入できるような取組を行っていきたいと思います。また、後発品薬品調剤体制加算 I を算定できるよう、継続した後発品への取組も行うことで、医療費の削減につなげていきたいと思います。今後も地域医療構想が進む中で院外薬局とも情報共有を行い、地域医療に貢献したいと考えます。

（貝田 裕彰）

臨床工学科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

臨床工学技士　6 名

2. 臨床実績

医療機器管理台数	142 台		
定期点検件数	562 件	日常点検件数	13,928 件

3. 1 年間の活動と今後の展望

【血液浄化療法業務】

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、スタッフ、透析患者様一丸となって感染拡大防止に取り組んだ一年でした。血液浄化療法センターでは多人数用透析装置 23 台、個人用透析装置 6 台があり、月平均 55 名の患者様の治療を行っています。多人数が同時に同じ空間で行う治療であるため、感染伝番が起こらぬよう標準予防策の徹底、治療毎の装置およびベッドの消毒をはじめ、患者様にも不要な外出の自粛や自宅での検温、入室前の検温にご協力頂きました。隔離透析のシミュレーションや消毒方法の検討なども行い、発熱者への対応がスムーズに行えるように取り組みました。

通常の医療体制維持にも努め、透析通信システムや排水除害装置を含む透析に関連する全ての装置の保守管理に臨床工学技士（CE）が携わることにより、今年度も 90%以上の装置トラブルを科内で対処しました。

近年、血液透析と比較して透析アミロイドーシスや透析困難症に対する効果が期待される OHDF のニーズが増加傾向にありますが、当センターでも今年度、2625 例(前年比 140%)の OHDF を行いました。OHDF を行うためには厳しい透析液の水質管理が求められるため、毎月の水質検査をはじめとする透析液清浄化に取り組み、日本透析医学会で定められた超純水透析液の基準を開設から現在にいたるまで達成し続けています。

また、多様な病態やニーズに対応するため、特殊血液浄化療法も行っています。2020 年度は、腹水濾過濃縮再静注法 8 例、血漿吸着療法 24 例、LDL 吸着 12 例、持続血液透析濾過 1 例を施行しました。

【医療機器管理業務】

院内で使用する人工呼吸器・シリンジポンプ・輸液ポンプなど 100 台以上の医療機器を安全に使用するため、中央管理化し保守管理・点検・修理を行っています。また、毎日、病棟・外来の医療機器巡回を行い、適切に使用できているか、不具合はみられないか等を点検しています。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人工呼吸器の装備変更や HEPA フィルター付き人工呼吸器の導入、生体監視モニターの機能充実等を行い、医療機器を介した感染を予防するべく活動を行いました。

その他、各部署からの医療機器に関する相談、医療機器更新時の機器や消耗品の選定、看護師やその他の職種を対象に医療機器研修会や機器導入時の教育なども行っており、2020 年度は 29 件（前年比 160%）の研修会を実施しました。

今後も、専門分野の知識向上を図り、安全な医療機器の提供に努め、チーム医療の一員として地域医療に貢献出来るよう努力してまいります。

（藤本 菜摘）

臨床検査科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

検体検査部門　臨床検査技師　3 名

生理検査部門　臨床検査技師　3 名

2. 臨床実績

【検体検査】

生化学的検査	生化学	339,895
	その他	2,735
血液学的検査	血 算	20,071
	凝 固	4,422
	HbA1c	7,105
	その他	9,059
尿・糞便等検査	尿定性	8,941
	尿沈査	2,861
	便潜血	2,139
	その他	1,475
免疫学的検査	CRP	10,216
	感染免疫	5,046
	血液型	178
	不規則抗体	190
	ｸﾛｽﾏｯﾁ	297
その他		71

【生理検査】

循環機能検査	心電図	6,006
	ﾎﾙﾀｰ心電図	263
	その他	679
呼吸機能検査	肺活量等	192
超音波検査	胸腹部	1,235
	心 臓	1,021
	頸動脈	329
	下肢血管	50
	甲状腺等	94
脳波検査等	脳 波	36
	PSG 検査	24
神経・筋検査	誘発筋電図	53
	筋電図	4
その他		1,996

＜新規購入及び更新装置＞

多項目自動血球分析装置（ＮＸ-1000）

免疫発光測定装置（ルミパルス G600Ⅱ）

全自動遺伝子解析装置（Smart Gene）

3. 1 年間の活動と今後の展望

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大による影響を受け、検体・生理検査とも検査件数は減少しました。

年度当初は、新型コロナウイルス感染症に対する検査体制がない状況が続き感染症対策に苦慮しましたが、8 月にスクリーニング検査として抗原定性検査を導入しました。

その頃、より正確に診断できる PCR 検査は外注検査で対応していましたが、検査結果を報告するまでに長時間要する事が課題となっていました。

日々、新たな検査法が厚労省より承認された事を受け、当院でも抗原定量検査（ルミパルス G600Ⅱ）・PCR 検査（Smart Gene）を導入しました。

新しい検査だった事もあり、導入当初は担当技師も少し戸惑いがあったようですが、院内で迅速に検査結果が報告できる様になり、発熱者などにおける診療支援もよりスムーズに行えるようになりました。

また、10 月に検査精度の維持・向上を目的として多項目自動血球分析装置も更新しました。

今後は新規導入検査の精度管理が課題ではありますが、精度が確保できるよう取り組んで行きたいと思います。

これからも院内感染対策を十分に行い、地域の方々や近隣医療機関の皆様方へ検査結果をより迅速かつ正確に提供できるようにスタッフ一同努めて参りますので、今後とも宜しくお願い致します。

（小野 一充）

栄養管理科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

管理栄養士　2 名　　栄養士 1 名

〈委託〉　管理栄養士　2 名　　栄養士　3 名　　調理師　3 名

〈委託パート〉管理栄養士　2 名（実働 5H）　　仕込み　3 名（実働 5H）

朝昼洗浄　　5 名（実働 5.5H）　　夕洗浄　3 名（実働 3H）

調理補助　　4 名

（実働　7.75H、5.75H、4H）

七夕の日の献立

	食事指導件数		糖尿病教室実施状況		栄養管理計画書
月	入院件数	外来件数	実施回数	延べ人数	作成件数
4	4	28	0	0	278
5	1	16	0	0	238
6	8	20	9	16	303
7	12	37	16	25	318
8	16	33	16	41	284
9	6	37	15	15	323
１０	16	43	17	33	320
１１	12	30	15	27	310
１２	10	25	14	25	332
1	3	32	9	9	299
2	8	30	8	12	292
3	8	36	8	16	333

2. 臨床実績

一般食	食数	特別食	食数
常食	73.3	エネコン食	98.7
軟飯軟菜食	25.8	術後 6 回食	0.0
全粥食	16.0	易消化食	0.5
3・5・7 分粥食	3.6	低プリン食	0.0
流動食	1.0	低残渣食	0.8
嚥下訓練食	44.2	脂質制限食	1.1
かりん食	30.2	蛋白制限食	16.4
オーダー食	2.9		
延食	1.7		
ヨード制限食	0.0		
術前補水食	0.0		
短期ドック食	0.0		
濃厚流動食	27.1		
一般食小計	225.8	特別食小計	117.5

2020 年度

1 日平均食出数合計　　343.3 食

3. 1 年間の活動と今後の展望

コロナ禍で診療体制のみなおしを余儀なくされる中、栄養管理科の業務も一旦縮小の傾向を取らざるを得ませんでした。しかし、いつまでもそうしてはおれず、感染対策を徹底したうえでの個別栄養指導、集団の糖尿病教室の再開とコロナと向き合った体制作りに取り組んだ１年でした。ＮＳＴの回診はこの１年控えましたが、患者の栄養状態の取り組みは繰り返しのスクリーニングとモニタリング、栄養カンファレンスでの話し合いなどで状況把握には余念がありませんでした。いまだ終息が見えないコロナ禍の状況の中、栄養の大切さをあらためて実感しており、栄養状態の悪い患者様はもとより、自分は健康だと思っている方々にも免疫力をアップさせるための栄養情報の発信を積極的にしていきたいと考えています。それには先ず食事です。病院給食も食べてもらえなければ栄養になりません。見た目にもおいしい食事を届けられるよう、委託業者とも協力してこの問題に取り組んでいきたい。

（月木 伊都子）

リハビリテーション科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）	28 名
作業療法士（OT）	13 名
言語聴覚士（ST）	6 名
ケアスタッフ	5 名

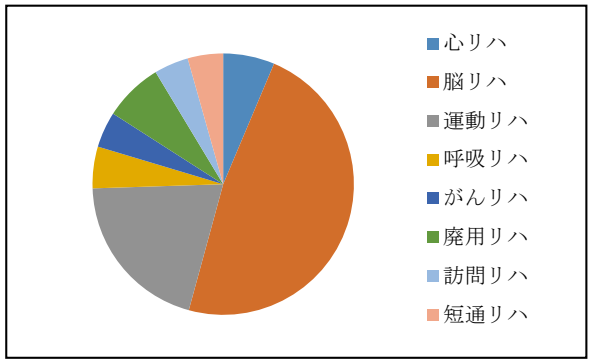
2. 臨床実績

リハビリテーション科の診療内容は、医療保険での各疾患別リハビリテーションと介護保険の訪問リハビリテーション、短時間通所リハビリテーションを実施しています。

2020 年度の各リハビリテーションの実施件数は、別表（表 1、図 1）の通りとなっています。

（表 1）リハビリテーション実施件数

リハビリテーション種別	単位数、件数
心大血管リハビリテーション	7,787 単位
脳血管リハビリテーション	58,603 単位
運動器リハビリテーション	24,778 単位
呼吸器リハビリテーション	6,294 単位
がん患者リハビリテーション	5,429 単位
廃用症候群リハビリテーション	8,931 単位
訪問リハビリテーション	5,199 件
短時間通所リハビリテーション	5,369 件

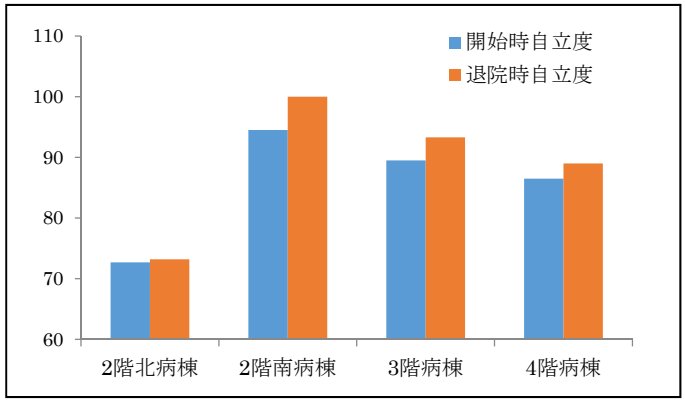


（図 1）各リハビリテーション実施割合

3. 1 年間の活動と今後の展望

リハビリテーション科は、2020 年度の目標を「リハビリテーション部門の充実」、「働きやすい職場環境づくり」、「地域ニーズに応えるリハビリテーション体制の整備」、「リハビリテーション部門の質の向上」の 4 つとし、取り組みました。

「リハビリテーション部門の充実」は、在宅生活の継続と社会参加の推進を達成するために、他職種間で目標を共有することを進めました。また、前年度より引き続き生活リハビリテーションの充実を図り、対象患者様の自立度を向上させることに繋げました（図 2）。



（図 2）各病棟別自立度（FIM）の変化

図の自立度の変化は、病棟により差が生じていますが、2 階北病棟は進行性の神経難病患者様、4 階病棟は急性期治療中

の患者様やがん患者様が多い事が要因と思われます。しかし、進行性の対象者の方にもリハビリテーションを実施する事で、自立度を維持･向上出来ているデータになっていると思われます。2 階南病棟と 3 階病棟は、地域包括ケア病棟として在宅復帰を目指した患者様が多く、より自立度の向上が図れているデータになっています。

「働きやすい職場環境づくり」は、スタッフのモチベーションを向上させる事を考え、各チームでの目標を設定、目標達成のためのプラン立案、成果の報告会まで行いました。自分たちの目標や成果を“見える化”したことで、チームで行う仲間意識の向上や課題に取り組む意識の向上に繋がりました。また、有給消化率の向上、時間外勤務時間の短縮を目的に時間内チームカンファレンスの実施やチーム外業務の業務シェアを行いました。結果、有給消化率（前年比 37％増)、時間外業務時間（前年比 48％減）共に改善が図れています。

「地域ニーズに応えるリハビリテーション体制の整備」は、地域講演や介護予防教室の活動を経て地域貢献に繋げていこうと考えておりました。しかし、新型コロナウィルス感染症の影響で病院外に出る機会が狭められ、現状、成果が上げられていません。

「リハビリテーション部門」の充実としては、コロナウィルス感染症で学会等の開催が中止や延期になる中、パーキンソン病・運動障害疾患 コングレスを始め、各学会に 5 例の演題登録を行いました。多くの学会が WEB 開催となるなか、Zoom 会議等を取り入れ、その他の学会参加も行いました。

2021 年度は、コロナウィルス感染症の対策を行った上で、より質の高い医療を提供していくことが求められると考えています。根幹である地域密着型の拠点病院という当院の役割を踏まえて、スタッフのベースアップやコロナ禍という厳しい環境に耐えられるリハビリテーション提供システムの構築を図っていきたいと考えております。

（山口 良樹）

放射線科

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

放射線技師 4 名　クラーク 1 名

2. 臨床実績

2020 年度業務実績　　（　）内は前年度件数

一般撮影	9125 件（10486）
骨密度測定	339 件（359）
ＣＴ撮影	2955 件（2784）
ＭＲＩ撮影	931 件（1103）
透視検査	607 件（505）

時間外対応

コール回数	97 回　（170）
撮影件数	176 件　（320）

2020 年度　主な放射線関連機器

一般撮影装置
ポータブル撮影装置
移動式外科用イメージ装置
Ｘ線デジタル透視装置（DSA）
全身用骨密度測定装置
マルチスライスＣＴ（16 列）
オープンＭＲＩ（０．４Ｔ）
ＣＲ読取装置
ＰＡＣＳ（院内画像配信システム）
遠隔読影システム

3. 1 年間の活動と今後の展望

今年度は一言で表すと新型コロナウイルス一色の年でした。年度初めには新型コロナが猛威を振るい十分な物資の供給も間に合わない中、いかに感染対策をしながら検査を施行していくか色々と試行錯誤しながら業務にあたる日々でした。年度末には抗原定量検査機器と PCR 検査機器が導入され院内でも新型コロナの迅速な判定が可能となり、感染対策に関する業務負担は大きく軽減されました。

検査数は新型コロナの影響もあり患者数、検査数が減少する中、CT に関しては新型コロナ特有の肺炎像を抽出する手段として活用され、件数は増加しました。

年々、高度医療機器による画像診断は進歩を遂げ多様化しており、これら複雑で膨大な画像データは遠隔読影システムを通して放射線科医による読影を行い、主治医とのダブルチェック体制をとっています。

私達はこれに対し充実した画像を提供できるよう医師との定期的な画像カンファレンスを行い、日々知識の向上と技術の習得に努めています。

また 24 時間オンコール体制をとり時間外での救急医療にも対応しています。

今後も徹底した感染対策を継続し、地域の方々・近隣の医療機関の皆様へ安心と満足のできる医療を提供していきたいと思います。

これからも思いやりをもって患者様に接するよう業務を実践し、少しでも地域医療に貢献できれば幸いです。

（久間 伸彦）

看護部

2020 年度も看護部の目標に沿って活動を行いました。

１．看護の質の向上

ヒヤリハット報告件数は 324 件と前年度より減少（注射は全体の 14%、与薬は全体の 24%）している。

指さし呼称に関しては、指さし呼称に関係ありが 137 件で全体の 68.5%を占めている。また、検査漏れの事例もあり、必ず指示内容の確認、現物と処方内容の確認を求められているができていない。ダブルチェックも上手く機能しておらず、思い込みによるミスが多い。

コロナ疑い患者収容のため 4 階を対象病棟とし、最大 3 名まで受け入れ可能とした。9 月より 4 階病棟は 3 名夜勤体制に変更、外来部門・病棟でのゾーニング・患者受け入れ態勢も徐々に整いスムーズな受け入れができている。

電カルに関するマニュアルの見直しは少しずつでき、操作に関しては、だいぶ慣れてきているように思えるが、記録のための時間外も続いている。

今年度はコロナウイルス感染拡大により様々な研修が中止となった。一部オンラインとなったが看護協会主催の研修は前半ほぼ中止となった。院内でのラダー対象の研修は計画的にできている。

２．病院の経営基盤の強化

新型コロナウイルス感染拡大のため外来数および入院数が激減しており、また、地域活動への協力もできていない。今後のコロナ感染状況を見ながら、増患を考えていく。

３．連携機能の促進

毎朝のベッドコントロールおよび毎週 1 回の合同会議は継続している。

各病棟での他職種を交えたカンファレンスも行えており、他部門との連携も取れている。

４．働きやすい職場作り

2019 年度より勤務改善委員会を開催し改善にとりくんでいる。今年度は「昼休みをきちんととる」を目標にしているが、取れている部署そうでない部署とまちまちである。

認知症患者の増加とコロナ禍で業務量が増えており職員の疲弊は続いている。

今年度より TQM 活動により業務改善に向けて取り組んだ。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため様々な対策を余儀なくされた。

年度初めより臨時の感染対策委員会を数回開催。マスクおよび手袋・アルコール消毒液等感染予防に必要な物品の不足により、様々なところに手配し何とか確保できた。マスク及びビニールエプロンは自院での作成や近隣中学校や保育園からの寄付などがあった。

今までにない未知のウイルスに対し手探り状態での実施だったが職員一人一人の努力により、現在までに院内での患者・職員の感染は無く安全に業務を行うことができている。ウイズコロナの時代に、できるだけ通常の業務に戻せるように業務調整し安全で質の高い看護を提供できるように努力していきたいと思う。

（江口　敦美）

2 階北病棟

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

病棟師長 1 名　正看護師 19 名　准看護師 2 名　ケアスタッフ 4 名　クラーク 1 名
ＭＳＷ　1 名（専任）

2. 臨床実績

延べ入院患者数	787.7 名
病床稼働率	86.4%
新入棟患者数（転入数）	34.6 名
新退棟患者数（転出数）	35.1 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

当病棟はパーキンソン病をはじめ、多系統萎縮症、脊髄小脳変性症、大脳皮質変性症、筋萎縮性側索硬化症（ALS）等の神経難病患者さんや身体に障害がある患者さんを対象にした「障害者施設等一般病棟」です

神経難病ははっきりした原因や治療法が未だ分かっていない病気を言い、活動の低下や嚥下機能低下、コミュニケーション障害などが徐々に起こってくるため、日常生活に支障をきたします。私達は患者さんが出来るだけ在宅生活が継続できるように、ご家族の介護負担軽減を目的としたレスパイト入院を推進してきました。現在 50 名前後の方がレスパイト入院を利用し在宅生活を継続されています。介護負担のほか定期的にリハビリを集中して行うことや病状の評価、薬剤調整を行うことで、病気の進行を緩やかにできるメリットがあります。

在宅支援では他事業所の居宅介護支援センターや訪問看護･介護ステーションとの連携も重要で、継続看護がスムーズに行えるような情報提供や退院時カンファレンスを積極的に開催し顔の見える関係作りにも力を入れています。

医師・看護師・リハビリを軸として、栄養士・薬剤師・MSW など他職種で定期的にカンファレンスを行い情報共有し一人ひとりに適切な医療の提供ができるようチーム医療を実践しています。

2020 年度の病棟目標では看護の質の向上として医療安全管理を行い的確な看護を提供することを挙げ、確認不足によるヒヤリハットを減少させることに取り組みました。全体のヒヤリハットは 45 件であり、その内注射・与薬に関するヒヤリハットは 22 件で、そのほとんどが確認不足でした。指さし呼称関連ありは 20 件でした。

ダブルチェックを行っていてもヒヤリハットが起こっていたため、ダブルチェックのやり方を病棟会で検討し 2 人同方向のチェック方式を採用し実践しました。

コロナ禍では感染対策が喫緊の課題でした。リンクナースを中心に吸引時、食事介助時、入浴時のフェイスシールドの使用をスタッフへ呼びかけを行い周知しました。物品不足もあり十分な対策が出来ない状態でしたがリンクナースによる工夫や多方面から手作り品の提供などあり心強く感じました。

コロナの収束は先が見えない状況であるため、継続した感染対策を行いクラスターを発生させない取り組みをしていかなければならないと考えています。

その他に、医師会付属の看護専門学校や福岡看護大学看護学生の統合実習の受け入れを行いました統合実習に関しては今回初めての経験で、またコロナ禍で制約も多く十分な実習の提供とは言えませんでしたが、これからも引き続き教育受け入れ施設としてのスキルアップに努めていきたいと思います。

今後もさらに神経難病に対する専門性を高め、質の高い看護の提供を実践していくことを目標にして皆様により良い医療の提供を行っていきたいと思っています。

（坪山 由香）

2 階南病棟

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

看護師長 1 名　看護主任 1 名　看護師 22 名　准看護師 1 名（糖尿病療養士 2 名）
ケアスタッフ 3 名　退院調整看護師 1 名　専任リハビリセラピスト 1 名
病棟クラーク 1 名

2. 臨床実績

＜年間入院患者数＞

	一般	地域包括	入院総数
2019 年	257 名	647 名	904 名
2020 年	268 名	526 名	794 名

＜一般平均在院日数＞

2019 年	13.1 日
2020 年	10.9 日

＜地域包括ケア病床在宅復帰率＞

2019 年	92.8%
2020 年	92.4%

＜病床稼働率＞

	一般	包括
2019 年	77.7%	78.2%
2020 年	67.9%	77.3%

＜眼科手術件数＞

	2019 年	2020 年
前眼部	732	553
後眼部	114	78
眼表面	17	14
外眼部	37	7
特殊眼	21	17
計	921	669

＜糖尿病入院者数＞

2019 年	54 名
2020 年	58 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

2 階南病棟は、一般病床 11 床、地域包括病床 27 床の混合病棟です。主に眼科の周術期看護と糖尿病の合併症精査を含めた教育入院を中心に、腎臓内科や一般内科、BSC を含めた緩和ケアや整形外科を対象としています。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症に影響し、入院患者数の減少は避けられない状況でした。病棟の感染予防対策としては、感染リンク委員を中心に 5S メンバーと協働し、換気、清掃、手洗い手指消毒、マスク装着の促しやスタッフの日常での感染対策に取り組みました。また、入院患者と家族との面会は、「少しでも家族との時間を」という病院の方針のもとに予約制を用い、感染対策を並行しながら時間制限やオンラインで行いました。患者家族の方には、慣れない不自由な感染対策にご理解ご協力を頂き、陽性者が一人もなく 1 年を乗り越えたことに感謝しております。

ベッドコントロールでは、一般在院日数 10.9 日とスムーズに治療を行い、退院や地域包括病床への移動を行うことができました。地域包括病床では、在宅復帰にむけ、退院調整看護師

やリハビリと協働し、患者さんや家族を含めたカンファレンスに取り組みました。退院支援を協同で行い、今年度は 92.4%の在宅復帰率を得ていますが、中間/退院前カンファレンスの開催が遅れ余裕をもった環境調整ができない時がありました。今後の課題として、月・水・金曜日の眼科手術と平行し、スムーズな退院支援ができるように各受け持ち看護師が計画性をもって退院支援に努める必要があります。患者さんや家族の想いを尊重した退院支援を目指し、一般病床から地域包括病床へのスムーズなベッドコントロールに努めてまいります。

眼科の手術件数は、新型コロナウイルス感染症の影響で、昨年度より減少となりました。感染が流行する中でも、手術を必要とする患者さんが通常の治療を受けることができるように、眼科医や視覚訓練士と連携をして、密にならない眼科回診の工夫を行いました。また、病棟の診察室にも換気扇を設置するなど環境整備も行い、感染のリスク軽減にも努めました。視力は、日常生活に直接悪影響を与え、QOL の低下に繋がります。退院される患者さんが見える喜びを感じ、日常生活を楽しむことができるよう、今後も眼科の周術期看護に努めてまいります。

糖尿病患者の入院数は、昨年度より数名の増加となっています。病棟では、医師、外来看護師、栄養士、検査技師、リハビリセラピストと、チーム医療として症例カンファレンスを行い、それぞれの専門的な視点から患者さんに必要な医療や指導内容を検討しています。また、医師を中心とした勉強会を毎週 2 回開催しており、知識の向上に努めています。Ⅱ型糖尿病は自覚症状がほとんどないため、医療者からの適切な指導と、患者さんの病状の理解や定期的な検査が必要です。入院患者さんの日常生活での問題を共有し、いかに上手く病気と付き合いながら社会生活をおくることができるかを目標とし、今後も患者指導や糖尿病センターとの連携を強化していきます。

（犬束 由起子）

３階病棟

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

看護師 18 名、ケアスタッフ 4 名、介護福祉士 1 名、キーパー2 名

2. 臨床実績

入院件数	242 名
転入件数	129 名（一般病棟より）
退院件数	356 名
在宅復帰率	89 ％
稼働率	82.2 ％

3. 1 年間の活動と今後の展望

3 階病棟は地域包括ケア病棟であるため、60 日という限られた入院日数の中で患者さん、ご家族が希望される退院先（療養先）へ調整を行っています。多職種連携にも力を入れておりカンファレンスの充実を図り、MSW、RH との情報交換を常に行っています。病棟内の生活と日々のリハビリテーションを通して ADL、IADL 獲得に向けて日常生活の援助を行っており、また安心して地域で暮らせるように必要な方には家屋調査を実施し自宅の環境調整も行っています。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、徐々に家屋調査の件数が減る、人数を調整する為カンファレンスの職種を制限するなど感染対策を行いながらの退院調整が必要な状況となってきています。スタッフも戸惑いがある中でも出来る限りの調整を行う努力をしている状況です。

今年度は TQM 活動で患者さんの ADL（移動や排泄）を把握しケアの統一を図るため ADL ボードを作成して掲示するようにしました。RH 担当者が作成する認定証との併用で患者把握につなげることができました。今後も使用を継続し、患者の状態を把握することで転倒件数の減少に繋がればと考えています。

今後の展望としては、当院の在宅サービスを利用されている場合はスタッフ間で情報共有し退院後の生活状況を把握していますが外部のサービスを利用される方も多く、実際の退院後の生活の評価ができていないのが現状です。また昨年度と同様に例年の様な退院調整が出来ない状況が続いているため安全に自宅や施設へ退院できる環境を整えることが難しく感じています。家屋調査が出来ない場合もケアマネに RH スタッフから情報を伝達しサービスの提案をするなどコロナ禍での退院調整に適応する必要があると思っています。面会制限により家族指導が十分に行えないため訪問看護を利用して継続した指導を依頼するなど今後も工夫しながら患者さんの在宅復帰をサポートしていきたいと思っています。

（廣畑 直子）

４階病棟

1. スタッフ紹介（2021年3月31日現在）

看護師　19名

准看護師　２名

ケアスタッフ（パート含む）　３名

2. 臨床実績（2020年度）

入院件数	566名
退院件数	347名
転棟件数	207名（地域包括ケア病棟＋緩和ケア病棟）
稼働率	74.5%（前年度12.6%減）

・循環器心臓リハビリ件数　37例　：ペースメーカー植え込み術・電池交換術　11例

・化学療法件数　17例（悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群、ATL、白血病など）

3. １年間の活動と今後の展望

病床数３４床内科・整形外科を含めた一般病棟です。急性期から終末期とそれぞれの回復段階とさまざまな疾患の患者様に合わせ日々看護を行っています。

当病棟の特徴の循環器疾患は、高齢者の心不全、弁膜症、術後の心臓リハビリテーション、ペースメーカー植え込み術・電池交換術の事例が多く、リハビリ部門と連携し外来心臓リハビリへ積極的に繋げ再入院の軽減を目指しています。また福大病院心臓外科・循環器内科の外来を増やし、協力体制を更に深めていけるように連携を取っています。

血液疾患では、化学療法継続目的が多く、副作用を最小限に抑えることで、入院は短期間で自宅での生活を送りながらスケジュールを組み最終コースまでの治療を行っています。患者様が安心して治療が行えるような環境を提供できるように努めています。当院は緩和ケア病棟があり、一般病棟での終末期患者の緩和ケアや看取り、急変時の対応と幅広い看護実践を強いられます。そこで多様な知識・技術を必要とするため、病棟内でチームを結成し定期的に勉強会の開催を行い看護の質の向上に努めています。

入院時から退院を見越した支援を行うため、患者様ご家族様の意向を随時確認し、多職種と連携を取りながら地域包括ケア病棟への調整を行っています。

看護研究では、高齢者が多く皮膚トラブル件数も目立ち、この問題に焦点をあてた看護研究に取り組みました。なるべく患者様に負担が掛からない方法で日々ケアの提供が行えないか模索しながらケアの充実に努めています。

2020年度は、内服注射に関するヒヤリハットが26件、前年度と比べ４５％減少しました。毎年内服注射に関するヒヤリハットが多い傾向にあり、よりよい対策で安全な管理で看護提供ができることが課題と考えています。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、感染対策のため病棟編成を行った事で大幅な稼働率の低下が生じました。病院全体で対策を行い、患者様・スタッフからの感染発生が無かったことは、感染対策が評価でき自信が持てた一年だったと感じます。収束の目途が立たない状況下で、当病棟スタッフは患者様に寄り添い、温かみがありその人らしさを大切にをモットーに「ここに来て良かった」と言って頂けるようなチーム医療を目指していきたいと考えています。

（高田　千寿香）

緩和ケア病棟

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

専任医師　１名　兼任医師　２名　　精神科医師　１名（非常勤）MSW　２名
臨床心理士１名　（非常勤）口腔外科医　１名　（非常勤）
看護師 20 名、ケアスタッフ２名、介護福祉士１名、クラーク１名
ボランティア

2. 臨床実績

新入棟患者数（転入含む）	200 名
退棟患者数　（転出含）	244 名
平均在院日数	30.9 日
病床稼働率	83.8%
自宅（施設）への退院患者数	32 名

3. １年間の活動と今後の展望

当緩和ケア病棟のベッド数 20 床（有料個室 10 室　無料個室 6 室　2 人部屋 2 室）です。入院患者様の多くが近隣の治療拠点病院からの紹介で、がんを抱えて生きておられる患者様、ご家族の方の心身の苦痛を緩和すること、人生をサポートする事を目標にチームケアを行っています。患者様やご家族が何に苦しんでいるのか、まずは気づき理解し、チームで共有すること。その方らしさを知り、これからどんな生活を送りたいと思っておられるのかを聞き支援します。当病棟は看取りのケアが多くを占めていますが、症状が緩和し安定した方やご自宅での生活を希望される方へは在宅支援も積極的に行っています。入院基本料 1 を取得して以後、2020 年度も在宅復帰率は 15%以上を保持することが出来ました。がんの患者様は急に容態が変化します。希望された生活に時期を逃さずにサポートする事が必要だと感じます。その中で、生活を共にするご家族の不安に対しても在宅部門と連携し毎日を安心して患者様のサポートする事が出来るように支援しました。2020 年度はコロナウイルスの感染拡大に伴う面会制限等で入院中の患者様の自由はかなり制限されました。外出、外泊も原則禁止となり心苦しい思いです。病を患った方の１日１日はより大切な時間であるのに、大切な方と過ごす時間を制限されることは、緩和ケア病棟の理念である「生きていてよかったと思える」全人的ケアにご家族の存在が欠如してしまう事態でした。感染対策を周知しながら面会を継続すること、ご家族へ感染対策の必要性をご理解いただくことには苦慮しましたが、スタッフ一同頑張って伝えてきました。時間制限や人数制限を課した１年ではありましたが、最期の時間をその人らしく、大切な方と一緒に過ごしていただく時間と場所の提供が出来たことは、グリーフケアにつながったと思います。今後もしばらくはコロナ禍での感染対策を続けなければなりません。大切な方との繋がりを守ることが出来る様に医療者として伝えられることを考える。また、１回/年の遺族会も開催できない現状、ご家族がどうされているのか、継続したグリーフケアの方法を考える事も今後の課題だと感じています。

(高田 真弓)

中央材料室　手術室

1. スタッフ（２０２１年３月３１日現在）

　　看護師：７名

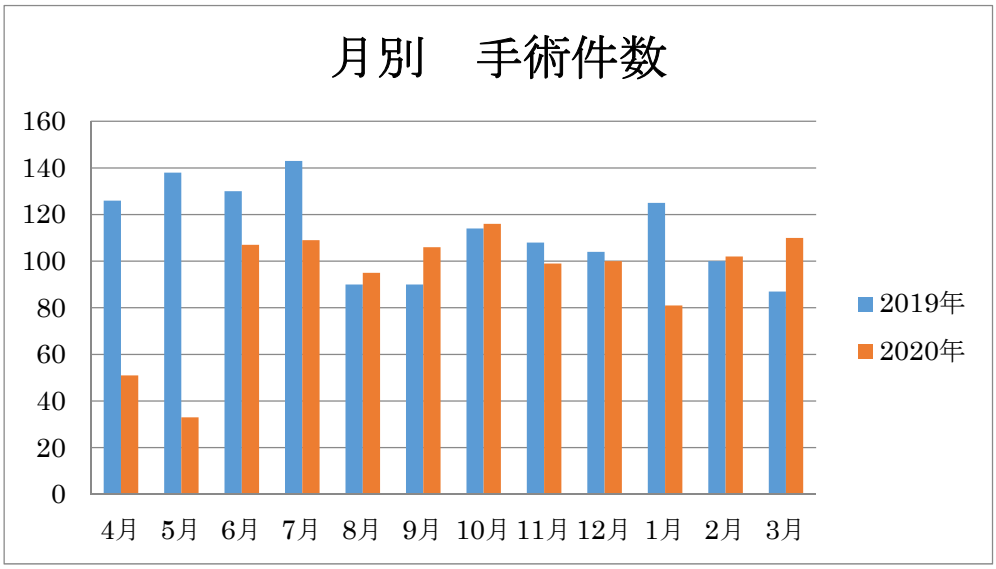
　　准看護師：１名

　　キーパー：１名（パート）

2. 臨床実績

　　手術症例数：１１０９例

　　（内訳：眼科/１０６０例　　整形外科/２７例　　循環器内科/７例　　腎臓内科/１５例）



3. １年間の活動と今後の展望

＜手術室＞手術症例数は眼科が特に多く実施されています。手術件数は、2019 年度 1357 件に対し 2020 年度は新型コロナウイルス感染の関連か他施設からの紹介も少なく、1109 件と 248 件減少しています。しかし、前年度と比較して、新型コロナウイルス感染拡大により緊急事態宣言間の 4 月、5 月、1 月では大きく下回っているが、他の月では殆ど差が見られず目標を達成することができました。(2020 年度目標件数 1000 件を下回らない)

記録時間等は、電子カルテ導入後から情報収集も効率良く出来、時間短縮に繋がっています。現在、術前外来と術前訪問は定着した為、次年度は術後訪問を定着させて周術期看護の充実を目指していきます。今後、新型コロナウイルス感染の状況によりますが、院外・院内での講演や地域活動も検討していきたいと思います。また、以前より病院機能評価で指導を受けていたＳＳＩサーベイランスを 2020 年 1 月から整形外科・循環器内科・腎臓内科を開始し現在まで感染者はありません。

＜中央材料室＞医材請求はＰＣでの入力請求となってから効率的に業務が出来ています。2020 年度は新型コロナウイルス感染により、個人防護具の高騰や欠品などが続きましたが、厚労省や近隣の保育園・中学校から手作りのエプロン、フェイスシールドなどを沢山頂き用途基準を変更しながらどうにか乗り切った状況です。今後も新型コロナウイルス感染の収束が見えるまでは個人防護具の確保は必須です。個人防護具の価格は若干の低下はありますが、

物品の供給などがコロナ禍前に戻った訳ではなく、今後も、「医材検討会」で在庫・物品供給情報・価格情報等の情報交換を行いながら、他の物品に対してもコスト削減を目指して行きたいと思います。

コロナ禍により院外研修の開催も少なく、常に進歩している医療・看護の新情報収集が不足している状況ですが、自部署内の学習時間を十分利用し知識を深めていきたいと思います。また、2021 年 3 月には眼科機器を 2 台購入して頂きました。これからも、スタッフの技術を向上させ先生方の協力を仰ぎながら手術室の業務改善を図り、手術看護目標である「患者さんが安心して手術が受けられるよう「安全第一」に周術期看護の実践」を目指していきます。

（立石　正子）

外　来

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

　看護師　18 名

　看護師（パート）3 名

　准看護師（パート）1 名

　眼科視能訓練士　3 名

　クラーク　2 名

2. 臨床実績

　各診療科参照

3. 1 年間の活動と今後の展望

1）コロナ感染拡大は外来にも大きな影響があった。外出を自粛している患者さんの為に電話診療・オンライン診療が開始となった。

オンライン診療は手続きの煩雑さや高齢者が多い当院では活用されているとは言い難いが、電話診療は希望者が一定あった。

感染対策は、発熱者のトリアージの徹底を行い院内でのコロナ感染の発生・クラスターの発生はなかった。

今後はコロナ感染症を拡大させず、院内でのクラスターが発生しないようにしながら通常業務（夜間発熱対応等）に戻っていく必要があると考える。

2）TQM 活動は「デッドストックをなくし、SPD 棚を使いやすくしよう！」をテーマに「あつまれ断捨離ナース」のメンバーが約半年取り組んだ。

外来で使用する物品は、来院患者数や患者の状態により大きく変化する。スタッフは物品不足を不安に思い、箱単位請求等で SPD 棚は物であふれていた。

そこで、「収納場所を明確にし、必要物品を見直し、棚の整理基準を決める事」で改善できるのではないかと対策をたてた。

結果、SPD 棚が整理でき物品を取りだしやすくすることができた。

今後の課題として、継続してスタッフへの周知徹底を実施していく事が必要であることがわかった。

この活動により、院内の投票で【奨励賞】をいただき今後のはげみとなった。

3）コロナ感染症の終息は見えず、感染対策を行いながら日常の外来診療活動を行っていく必要がある。

３月に院内に導入された抗原定量測定器（ルミパルス）により、即時に発熱患者をトリアージすることができるようになった。発熱があっても陰性であれば通常の診察や入院治療も可能である。この様にコロナ感染症対策をしながら以前の体制に戻しいく事ができればと考えている。

（深川 知栄）

総合相談室

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

　看護師　3 名（常勤 1 名　嘱託 1 名　パート 1 名）

　事務　2 名（嘱託 1 名　パート 1 名）

2. 臨床実績

2020年度入院支援対応件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入退院支援加算　無	19	18	21	21	19	24	28	32	15	26	12	24
入退院支援加算　有	1	7	17	8	12	6	12	13	10	8	24	16
入院時支援加算　有	24	11	11	36	29	42	32	29	29	29	29	27
総　数	44	36	49	65	60	72	72	74	54	63	65	67

3. 1 年間の活動と今後の展望

＊入院サポートセンター

入院前に情報収集し、電子カルテ入力することで患者情報を共有し、入院後の治療や看護がスムーズにいくよう入院支援を行っています。

支援件数 50 件/月以上を目標に実施し、月平均 60 件を達成しました。今年度からレスパイトの初回入院患者への支援も実施するようになったため、実績に示す通り目標以上の件数となりました。来年度は緩和ケア入院の支援も実施していく方向で検討中です。

今後の課題は、入院サポートセンター立ち上げ時から総合案内と同じ部署で支援を実施しているため一つの部署として独立できることです。

＊看護相談窓口

認知症、介護支援、緩和ケアなど医療を含め看護・介護の相談を受け付けています。

今年度から、毎週相談内容のカンファレンスを行いスタッフ間での情報共有と問題解決ができるようにしています。とても良いコミュニーケションの場となっています。

入院支援業務を同じ場所で行っているため相談が重なると対応が困難になっていますが、可能な限り相談をお受けすることができるよう相談室の配置を少し変更して声をかけやすいように改善しました。

（古閑 明美）

訪問看護ステーション

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

訪問看護師５名（管理者１名含む）

理学・作業療法士兼任３名

医療事務１名

2. 臨床実績

訪問看護の年次推移

	2018 年度	2019 年度	2020 年度
訪問件数　月平均 ※（）は総数	488 件 （6462 件）	464 件 （6462 件）	361 件 （4336 件）
新規契約数	70 件	70 件	75 件 ＜内訳＞ 医療保険　63 件 介護保険　12 件
終了者数	31 件	31 件	74 件
看取り数	20 件	20 件	27 件

3. 1 年間の活動と今後の展望

2020 年度の利用者数は，月平均４９名（医療保険 33 名，介護保険 16 名）であり，7 割が医療保険，3 割が介護保険での利用者となっております。医療保険で利用される方が多いのは，病院の特性として，緩和ケアの悪性腫瘍末期の方や神経難病の方のご紹介が多いということがあげられると思います。

看取り件数の増加は，緩和ケアからのご紹介があれば，できるだけ迅速に対応してきた結果もあるのではないかと考えております。

今後も，病院と連携を図りながら，継続した質の高い看護の提供ができるよう努めてまいります。訪問看護を希望される利用者様が，地域の中で安心して暮らせるよう，地域社会に貢献できるよう頑張っていきたいと思います。

(森山　千絵子)

居宅介護支援事業所「かりん」

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

介護支援専門員　6 名　　事務　1 名

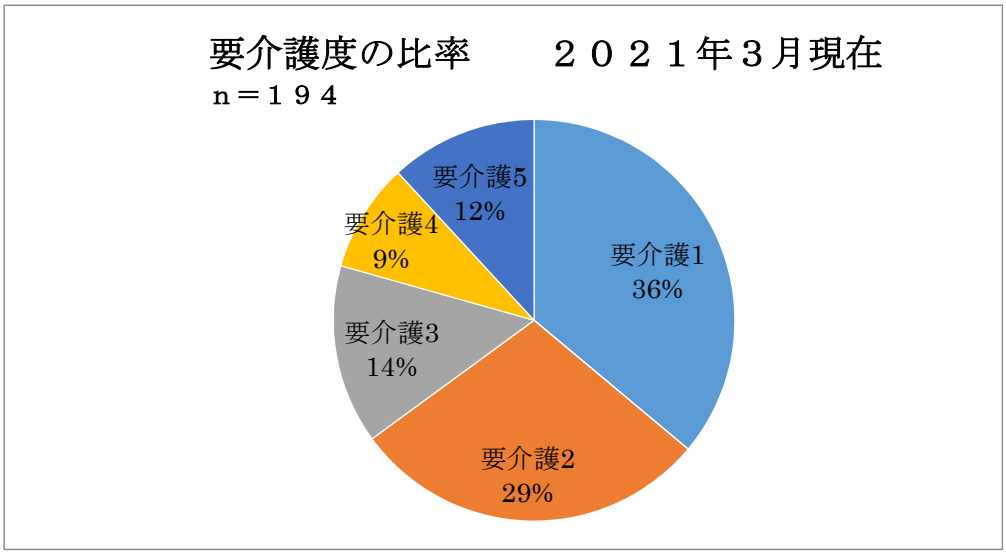
2. 臨床実績

居宅支援件数実績

	2019 年度実績	2020 年度実績
年間支援件数	2, 381 件	2, 470 件
月平均件数	198 件	205 件

※特定事業所加算Ⅱ算定

※2020 年度ターミナルケアマネジメント加算算定　10 件



3. 1 年間の活動と今後の展望

2019 年度、2020 年度と居宅支援件数は増加傾向となっています。緩和病棟を中心に各病棟担当のＭＳＷや外来からの支援依頼もあり、緩和ケアや神経難病の利用者様が比較的多いことが特徴です。地域包括支援センターからの支援依頼も増加しており、地域における当事業所の信頼と期待も大きくなっていると感じます。

2020 年度は、特定事業所加算Ⅱの算定を継続しながら、年間 10 件の在宅看取りに関わらせていただき、特定事業所医療介護連携加算（旧特定事業所加算Ⅳ）の算定要件を達成することができました。ターミナル期の利用者さんの支援は年々増加傾向にあり、利用者さん、ご家族が人生の最後の時間を少しでも安心して過ごすことができるケアマネジメントを提供できるよう、2021 年度も訪問診療の先生方や訪問看護師、ソーシャルワーカー等の多職種との連携を大切にしていきたいと思います。利用者さんは様々な病気や生活背景をお持ちです。

加算要件を満たしつつ、幅広いニーズに対応できるよう、研修会や居宅連絡会への参加はもちろん、週１回のミーティング、毎月１回の業務カンファレンスを行ない、介護支援専門員の資質向上や普段の業務改善を継続していきます。

今後も地域活動への貢献や、他機関・多職種との連携強化にも力を入れ、地域の皆様や関係事業所の皆様から、これまで以上に信頼される事業所を目指し、スタッフ一同努力をしてまいります。

（西島　勝也）

訪問リハビリテーション

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）4 名　　作業療法士（OT）1 名　　言語聴覚士（ST）1 名

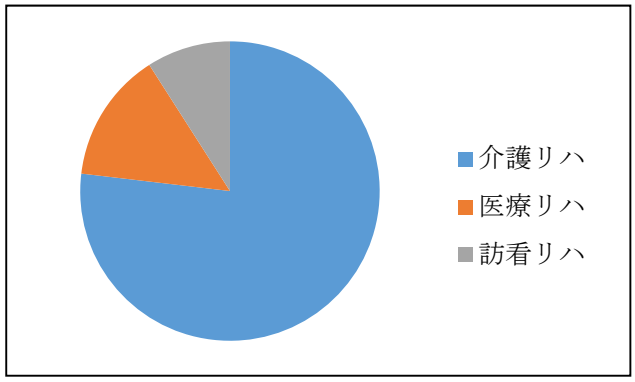
2. 臨床実績

訪問リハビリテーションは、介護保険と医療保険の訪問リハビリテーション、および訪問看護ステーションからの訪問リハビリテーションを実施しております。

2020 年度の実施件数は、別表（表 1，図 1）の通りとなっています。

(表 1)各訪問リハビリテーション実施件数

訪問リハビリ種類	実施件数
介護訪問リハビリ	3949 件
医療訪問リハビリ	723 件
訪問看護リハビリ	465 件



(図 1)各訪問リハビリテーション実施割合

3. 1 年間の活動と今後の展望

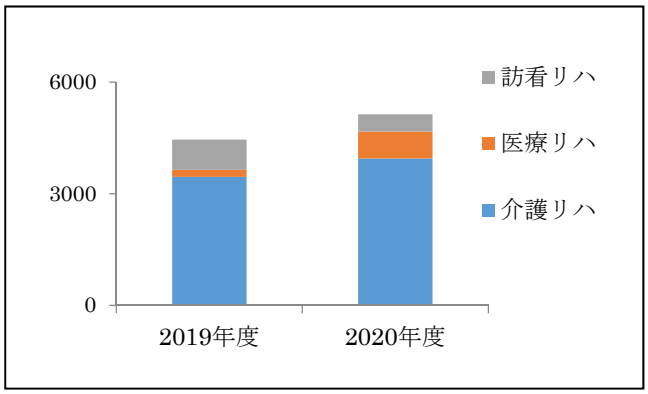
2020 年度の訪問リハビリテーションは「シームレスな医療と介護の連携」,「地域ニーズに応える訪問リハビリテーション体制の整備」を主目標に取り組みました。

「シームレスな医療と介護の連携」では、当院入院中の患者様で退院後の訪問リハビリを開始することを検討している方については、退院前カンファレンスへの参加や入院中の訪問リハビリスタッフによる顔合わせを行いました。これを行うことにより利用される際の情報の密度を増し、かつ利用者様の安心感獲得に繋げられています。また、訪問リハビリを利用されている方が，当院に入院される場合は、訪問リハビリスタッフから入院中の担当スタッフに詳細な情報提供を行い、入院中のリハビリテーションをより在宅環境に合わせたもので提供できるようにしました。

「地域ニーズに応える訪問リハビリテーション体制の整備」では、デイサービス等、訪問リハビリ以外の介護サービスを利用されている方について、他サービス利用時の見学を行い、他サービス提供事業所との情報の共有、利用者の参加の場における必要能力の確認を行いました。また、当院以外に入院された患者様についてもケアマネジャーと連携し退院前カンファレンスに参加させていただきました。これらの活動は、コロナ禍の影響もあり多くは実施できませんでしたが、訪問リハビリ場面だけではなく、様々な生活場面の課題を把握できることで本当のニーズを把握することにつながり、リハビリテーションプランの立案に役に立てられます。その他には、昨年度より引き続き祝日の代替え利用の促しや、院内スタッフの代理訪問機会を増加させることを行い、受けられるべきサービスの漏れを防ぎ、実際に利用件数の増加につなげることが出来ました（図 2)。

2021 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により人の行動範囲が狭まり、訪問リハビリを利用される方はより不活動になることが危惧されます。そこで活動範囲の評価等を加えていき対策をとっていくことを始めております。

新型コロナウイルス蔓延下でも質の高いリハビリテーションを提供できるよう行動していこうと考えています。



(図 2)　訪問リハビリ実施件数前年比

（山口　良樹）

通所リハビリテーション事業所（デイケア）

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

6-7 時間

理学療法士　：6 名（パート 1 名を含む）
作業療法士　：1 名
看　護　師　：5 名（パート 2 名を含む）
介護福祉士　：6 名
ケアスタッフ　：9 名（パート 4 名を含む）
事務職員　：2 名

1-2 時間（短時間通所）

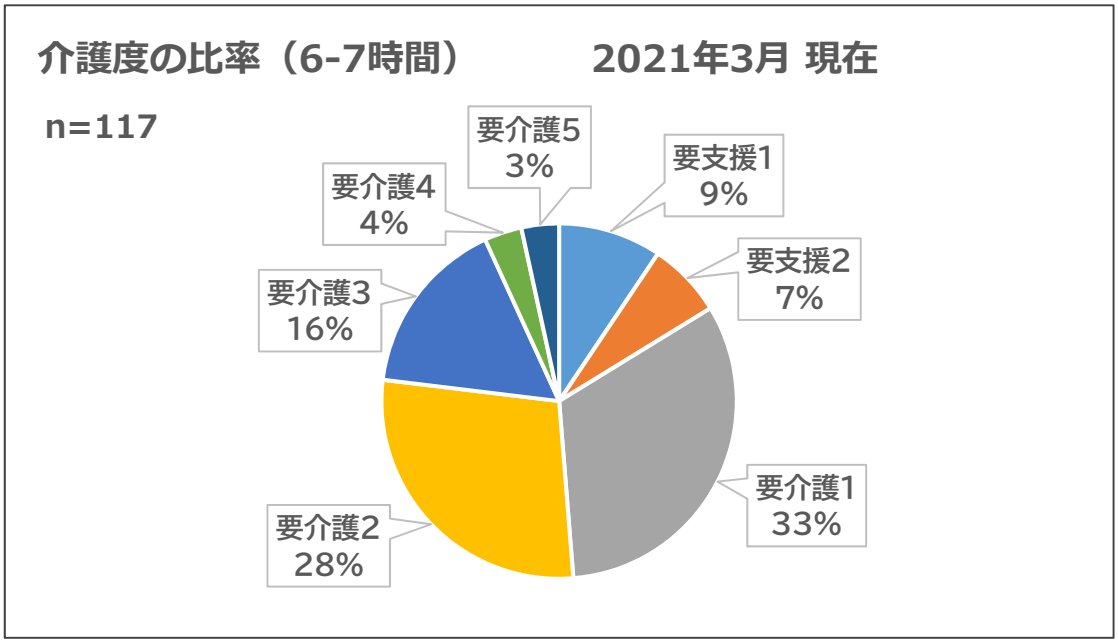
理学療法士　：6 名
ケアスタッフ　：4 名（医療リハビリと兼任を含む）

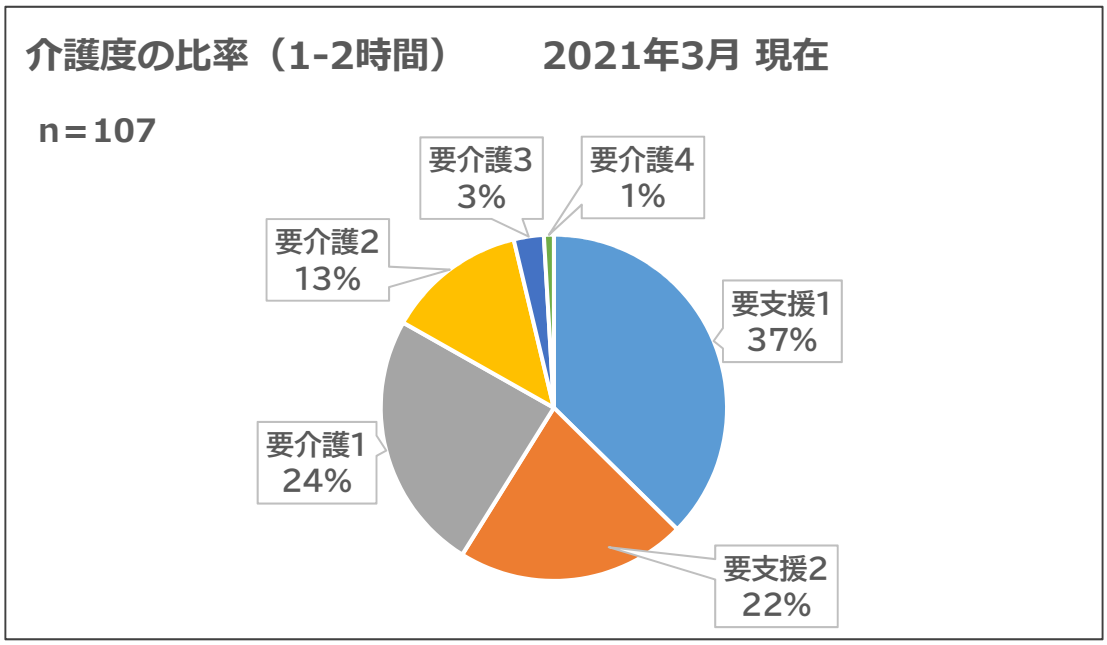
2. 臨床実績

2020 年度　通所リハビリテーション利用者数と社会参加数（要支援の方を含む）

	1 日の平均利用者数	延べ人数	社会参加数
6-7 時間	38.4	11,087	2
1-2 時間（短時間）	20.8	6,050	9

◆ 社会参加率が 5%を超え、社会参加支援加算を算定しています。
◆ リハビリテーション提供体制強化加算を算定できるリハビリスタッフの体制があります。





3. 1 年間の活動と今後の展望

2020 年度は、認知症の方への取り組みを強化しました。具体的には、認知症のご利用者様のご家族に介護負担に関するアンケート調査を行い、具体的に困っている事を把握しました。（対象：26 名）それに対し多職種でチームアプローチを実施し、半年後に 26 名中、13 名は介護負担が軽減し、3 名が維持されていました。

また、生活リハビリの推進にも取り組みました。利用者様の短期目標を各職種で共有し,それぞれの職種が行うことを明確にしてチームアプローチを実施しました。成果として、社会参加率が 5%を超えることが継続できております。

今後も、「地域のお年寄りと利用者様が在宅において、その人の有する能力に応じ、その人らしく日常生活ができるように支援します」を理念として、利用者様・ご家族へより質の高い支援ができるようにスタッフ一同努力をしてまいります。

（椎葉 博基）

事務部総務課

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

事務職員	7 名	（課長 1 名　主任 2 名）
事務職員（パート）	3 名	
ﾒｯｾﾝｼﾞｬｰ・ﾘﾈﾝ管理（パート）	5 名	

2. 1 年間の活動と今後の展望

看護部が行っていたリネン管理業務を総務課管理に変更し、メッセンジャーとリネン管理各 2 名の業務を 4 名で兼務する体制作りに取り組みました。それぞれの業務者の情報を共有することにより、多くの業務改善につながりました。また、勤務交代が容易になり、2020 年度は 1 度も欠務することなく業務を行ったことは、大きな成果だと思います。

病院全体の取り組みとして、2020 年度よりＴＱＭ活動を開始しました。総務課は、煩雑であった医師のスケジュール管理に取り組み、病院内の職員が誰でも最新の情報を得られる仕組みを作りました。この取り組みの過程で、多くの重複した情報や、更新されていない情報の存在が明らかになり、併せて院内の情報発信文書の見直しも開始しました。この活動は 2021 年度も継続し、職員に洩れなく情報を提供できる仕組みを作りたいと考えています。

2019 年 5 月に看護師、臨床工学技士と共に「医療材料・物品管理検討会」を立ち上げ、医療材料の検討、管理方法等について検討を進めていました。2020 年になると新型コロナウイルスの影響で必要な物品を確保することが難しくなり、物品の確保、代替用品の選定などに多くの時間を費やすことになりましたが、「医療材料・物品管理検討会」で検討していた物品管理方法などが、この緊急事態を乗り切ることに大いに役立ったと思います。年度末になると物品の供給は滞りなく行われるようになりましたが、在庫管理、危機管理について多くの課題があることを実感しました。今後は緊急事態に対応できる方法の確立を課題とし、より良い管理方法となるよう検討を続けます。

新型コロナウイルスの流行は経験したことのない患者数減を招き、病院経営に大きな影響を与えました。総務課は現状を把握し、オンライン診療の整備、ワクチン等のシステム対応、感染対策のための設備導入等に力を注ぎました。大きな器械・設備導入は、通常であればじっくり検討を重ね決定しますが、感染対策設備は緊急を要し、尚且つ様々な条件をクリアせねばならず、行政等に相談しながら進めました。新型コロナウイルス対策の業務は大きな負担となりましたが、通常業務の進め方を再考したり、各部門との協力体制が強化されるなどの良い効果も得ることができました。

2020 年度に経験した緊急事態は、医療に携わる者としての総務課の役割を再認識することとなり、今後の総務課業務がより良いものとなるきっかけを作ることができたと感じています。より良い職場環境、医療環境となるよう、総務課全員協力し取り組んでまいります。

（瀬戸　早苗）

事務部医事課

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

事務職員（医事課内・受付含）	11 名
事務職員（医事課内・受付含）パート	4 名
診療情報管理室職員	3 名
医師事務作業補助者	4 名
医師事務作業補助者　パート	2 名
病棟クラーク　パート	4 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

2020 年度の活動の中心は、「働き方改革」と「スタッフ育成」でした。

働き方改革については、2019 年度から継続的に活動しており、これまで基本的に時間外に行なっていたレセプト業務について、時間内に行なえるよう体制を整備しました。結果、活動開始前の約半分まで時間外業務を削減出来ました。今後も調整を継続し、子育て世代でも安心して働ける体制づくりを目指します。

スタッフ育成については、医事課内スタッフはレセプト業務について、全体的な底上げによりスタッフ間の業務量の偏りを軽減すること、返戻レセプト件数の減少させること、を目標としました。TQM 活動として返戻レセプト件数減少に取り組み、これまで一部のスタッフのみで対応していた返戻再請求業務を、全員で返戻内容把握、再請求準備を行う方式に変更しました。それにより返戻理由を理解するスタッフが増え、スタッフ底上げとともに、返戻金額の減少も実現出来ました。診療情報管理室は、病棟クラーク、医事課内スタッフと連携し、病棟での必要書類不備、スキャン誤り等を減少させるべく取り組みました。医師事務室については、新たに緩和ケア外来への陪席業務を開始し、医師事務作業補助者としての活動の場を拡げるとともに、スタッフ底上げの為、陪席科のローテーションも開始しました。

医事課内スタッフについては、患者負担、レセプト請求及び診療に係る様々な業務、診療情報管理室については、診療録記載全般と国に提出する様々なデータ作成に関する業務、医師事務作業補助者については、医師が行う指示、記載等及び書類作成に関する業務、そして病棟クラークは、病棟における記録方法変更対応及び患者対応、と業務内容は異なりますが、それぞれが調整を重ね、当院に合った形を目指して活動してきました。今後もそれらの活動を継続していきます。

システム導入と時間外業務減少により、子育て中の職員も安心して働ける環境整備と、教育による医事課全体のレベルアップを今後も進めていきます。

（渡邊 英則）

地域連携室

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

医師　　1 名

医療ソーシャルワーカー(以下 MSW)　5 名

看護師　1 名

事務　　1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

地域連携室は、主な役割である連携業務と入退院支援業務を通して、地域の医療及び福祉、保健機関との連携を図り、患者さんが安心して継続的に医療・看護・福祉を受けることができるように、また住み慣れた地域で、その人らしい生活を送ることができるように支援することを目指しています。

連携業務に関しては、地域の医療機関や介護福祉施設、各事業所や行政等を訪問し、面会することで、積極的な情報共有に努めております。具体的な活動としては、近隣クリニックを年間約 240 回訪問し、返書などを直接手渡しするなど、顔の見える連携を日々心がけております。

また、2020 年度は新型コロナ感染拡大の影響のため、地域に向けた活動は行えませんでしたが、2014 年からは地域の公民館などに病院のスタッフを派遣して、専門職による健康講座を開催するなど、地域住民の方の健康増進を目的とした活動にも力を入れております。

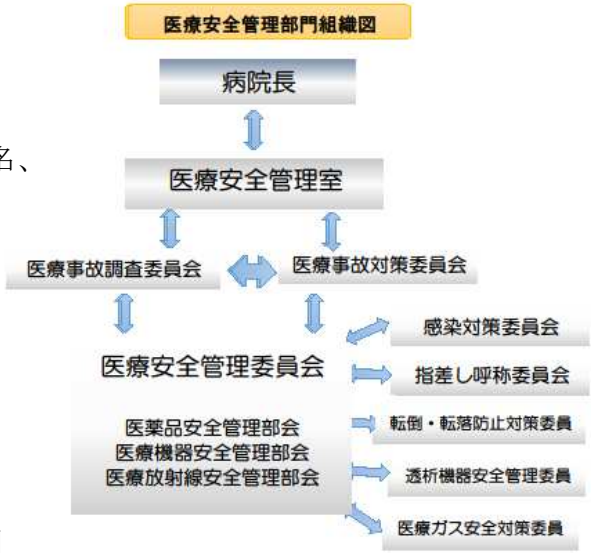
入院支援に関しては、看護師と MSW の双方が疾患別に担当者を決め、柔軟にかつ専門的に対応できるように入院の相談窓口として機能しております。今後は入院サポートセンターとも協力、連携しながらより円滑でスピーディーな入院支援体制を確立していきたいと思います。

退院支援は MSW が担当し、より多くの患者さんに早急に介入できるよう、また細かな対応できるように各病棟に専属の MSW を配置しております。2020 年度は相談件数が月平均 1000 件に達するなど相談件数は年々増え、相談内容も複雑、多様化しているのが現状です。そのような状況下で、院内外の多職種との連携を図り、チーム一丸となって退院支援に取り組んでおります。

地域包括ケアシステムの推進が求められる中、今後はスタッフの増員を図るなどして、より地域とのつながりを強化し、在宅支援病院としての役割を担うべく、切れ目のないシームレスな医療が提供できるよう努力していきたいと思います。

（八島 佐知）

医療安全管理委員会



1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

医師 2 名、医療安全管理者 1 名、看護部長 1 名、副看護部長 1 名

医局以外の各部署責任者 18 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

1）2020 年度総括

事故報告件数は医療事故 12 件、針刺し・切創事故は 5 件と前年度より増加しているが、転倒・転落 8 件と 3 件減少していた。（図 1 参照）

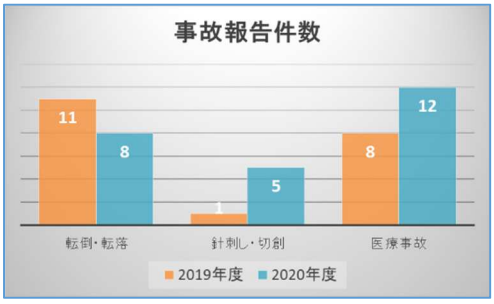


図 1　事故報告件数

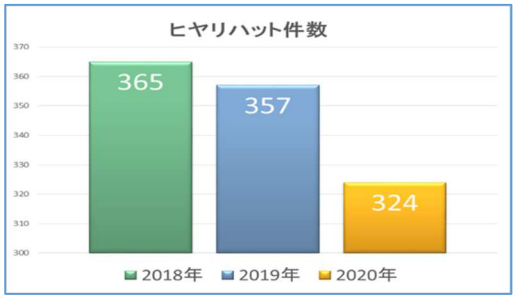


図 2　ヒヤリハット報告件数

ヒヤリハット報告件数では 324 件と前年度より減少、内容は与薬（24%）注射（14%）医事・会計・文書（10%）の順に多く、薬剤関連は年間 150 件から 141 件と減少した。（図 2.3 参照）

ヒヤリハットレベルでは指差し呼称委員会で「レベル 0」報告を増やし「レベル 2」以上を減少させる取り組みを行ったが、「レベル 0」報告が 19 件と前年度より減少し、「レベル 2」「レベル 3a」が増加しており、より多くのレベル 0 報告の提出ができるよう対策が必要である。（図 4 参照）

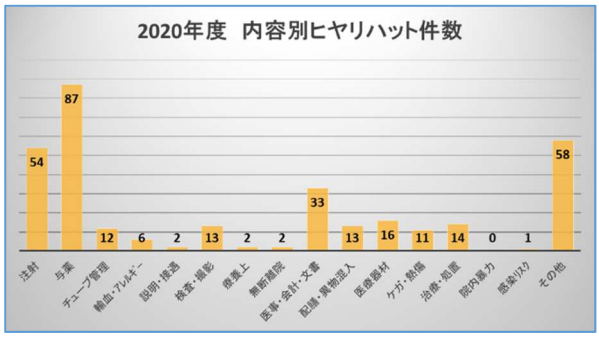


図 3　ヒヤリハット報告内容

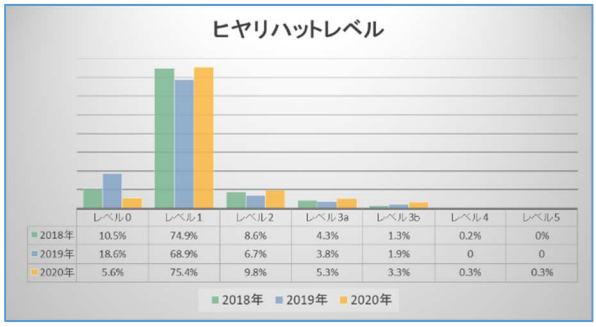


図 4　ヒヤリハット報告レベル

また、オカレンス報告書の書式を変更し、オカレンスレポートを医療事故調査制度該当者の判定につなげるよう体制を整え、2020 年 1 月より使用開始した。2020 年度は「来院後 24 時間以内の死亡事例」10 件、「予期せぬ患者の急変」1 件の報告があり、医療安全管理室にて検討し、全て追加報告書の必要性なしとの判断であった。

2020 年度に実施した主な取り組みは以下のとおりである。

(1) 事故防止対策マニュアルの改訂
(2) 新型コロナ感染防止のための人工呼吸器の回路変更
(3) インスリンに関するヒヤリハット対策として、インスリン実施手順をマニュアル化
(4) PTP シート誤飲防止として、ポスター掲示、看護手順改訂
(5) ベランダからの転落予防対策実施(97 ヵ所)

2) 今後の展望

各部署定期巡回の方法、内容の検討を行い、2021 年度より「患者確認」「ダブルチェック方法」「アレルギー対策」「与薬時の安全」「救急時の対応」「安全な環境」「個人情報管理」の各項目に関して、医療安全管理室メンバーが 2 グループに分かれて、全部署を対象に年 2 回の定期巡回を行う。

薬剤に関するヒヤリハットの分析、対策検討は医薬品安全管理部会の中で継続する。またヒヤリハットレベル 0 報告を推進し、レベル 2 以上の報告件数の減少を目指して指差し呼称委員会での活動を活性化させる。

（三井 淑子）

医薬品安全管理部会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

薬局長代行 1 名（医薬品安全管理者)、医師 1 名、医療安全管理者 1 名、看護師長 3 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

1）2020 年度の総括

昨年度のヒヤリハット件数は 357 件、内容は与薬（24%)、注射（18%）の順に多く、原因としては電子カルテの導入もあり情報確認の理解不足や 6R の指差し呼称ができないことが考えられる。そこで本年度は、医薬品安全管理部会メンバーと医療安全専従看護師の 2 名で病棟における注射および与薬実施時の 6R 確認、患者氏名確認の評価チェックを 2 回行いました。

インスリンに関するヒヤリハットも本年度は昨年に比べて増加した為、事例の分析を行い、全病棟で統一できる実施手順をマニュアル化したものと、一部病棟毎の手順で実施する項目に分けて対策を行った。

配薬漏れの対策については、一部の病棟で配薬前後の実施記録を 2 回行うことを試験的に

導入したが、ヒヤリハットの減少に繋げることはできなかった。

PTP シート誤飲のヒヤリハット対策については、医療安全管理室で検討し、パンフレットを作成して院内およびデイケアや訪問先の利用者・家族へ周知を行ったり、門前薬局にもポスター掲示を依頼したりしました。薬剤科でも入院中に服用する薬剤についてはできる限り分包を行い、退院時には薬剤情報提供書と共にパンフレットを準備して看護師が患者・家族に説明行うことで再発防止に努めた。

2）今後の展望

次年度も定期的に委員会を開催し、医薬品使用時の安全対策の実施が継続的に行われているかを見直すとともに、各部署での問題事項を把握しながら、事例の分析・対策に繋げていきたいと思います。特に薬剤に関するヒヤリハットの中で「配薬漏れ」に対するヒヤリハットの事例が多いため、各病棟で対策を再度検討し、評価を行っていきたいと考えています。

（貝田 裕彰）

医療機器安全管理部会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

医療機器安全管理者（常勤医師）1 名、医療安全管理者 1 名、看護師長 1 名、
臨床工学技士 1 名、　放射線技師 1 名、 臨床検査技師 1 名、 事務職員 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

医療機器安全管理部会は平成 19 年に発足し、医療安全委員会の部会として医療機器に係る安全管理を行っています。本会は必要時に開催され、以下の活動を行っています。

1. 医療機器安全管理部会議を開催し、医療機器に関する事故やヒヤリハット事例の検討と安全管理委員会への報告
2. 医療機器保守点検に関する計画の策定と実施
3. 医療機器の把握と管理および適切な情報提供
4. 人工呼吸器や体外式除細動器などの生命に直接影響を与える医療機器の厳重な管理と点検
5. 医療機器の添付文書の管理
6. 医療機器安全使用のための職員研修の実施
7. 医療機器の安全管理に関わる研究会や講習会への参加

2020 年度は医療機器に関するヒヤリハット事例は 4 件報告されました。いずれも機器の軽微な故障であり、患者様に被害が及ぶ事故はありませんでした。職員研修は計 25 回開催され、医療機器の安全使用に努めています。

（横山 昌典）

医療放射線安全管理部会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

放射線技師長１名（安全管理者)、医師１名、リハビリテーション科 ST １名、看護師１名

2. １年間の活動と今後の展望

１）2020 年度の総括

2020 年 4 月より医療被曝管理の義務化が施行され、それに伴いこの委員会を設置することとなりました。この背景として、日本の医療被曝の現状は患者 1 人当たりの被曝線量が世界平均と比べ約 6 倍高いことが指摘されています。また、米国と比べ一般 X 線撮影では 4.7 倍、CT 検査では 1.5 倍と高い結果が出ています。このことから検査を依頼する医師や検査を施行する技師等の医療被曝への意識を高めることが必要となりました。

委員会では、まず医療被曝に関しての指針を策定しました。また定期的な会議を開催し被曝線量の適正化を図り、放射線に従事する職員を対象として年に 1 度の研修を行い、被曝に対する知識の共有が求められることとなりました。

2020 年度上半期、当院の CT 検査の被曝線量の統計は、診断参考レベル（DRL s 2015）と比較すると、頭部・腹部・骨盤部に関しては基準値以下ですが、胸部は基準値をややオーバーしていることが判明しました。これに対応し、撮影条件を変更し、下半期は基準値以下に納まるよう調整を行いました。また、院内研修で医療被曝について研修も実施しました。

2）今後の展望

次年度は、診断参考レベルが 2015 年度から 2020 年度へ更新され、医療被曝基準が更に厳しく設定されます。定期的に委員会を開催し、当院の医療被曝について分析し検討していきたいと思います。また、医療被曝への意識を高め被曝低減へ努め、安心して放射線検査を受けて頂けるよう努めていきたいと思います。

（久間 伸彦）

転倒・転落防止対策委員会

1.　スタッフ紹介

【構成メンバー】

医療安全管理者 1 名、看護師 6 名、デイケア 1 名、リハビリテーション科 1 名

2.　1 年間の活動と今後の展望

1）2020 年度総括

昨年に引き続き、患者の療養環境を安全に保つことを目標に部署巡回を年 5 回実施し、各部署特有の問題点の解決策の検討、評価に活用した。ベッドサイドのコード類の整理のためにマジックテープの紹介、使用を推進したことで環境の保全につながった。

転倒・転落ヒヤリハットの分析では、2020 年度転倒転落事故報告件数は 8 件（前年度より 3 件減少）、ヒヤリハット報告件数は 230 件（前年度より 17 件増加）、レベル別ではレベル 1 が 170 件（73%）をしめ、レベル 2 は 28 件（12%）、レベル 3a は 22 件（9%）と前年度と比較し、レベル 2 の件数増加がみられた。（図 1.2 参照）

原因は患者の状態把握不足、不可抗力、管理ミスの順に多く、認知症状悪化、病状進行に伴う転倒・転落が多いことがわかった。

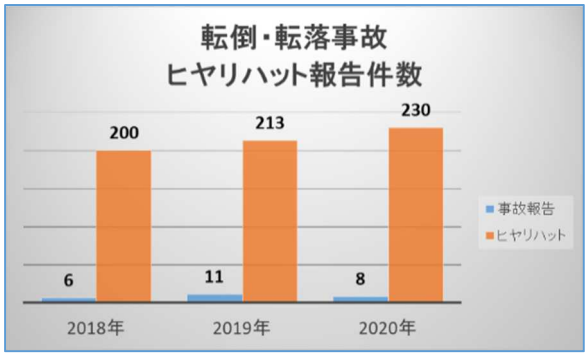


図 1　転倒･転落事故　ヒヤリハット報告件

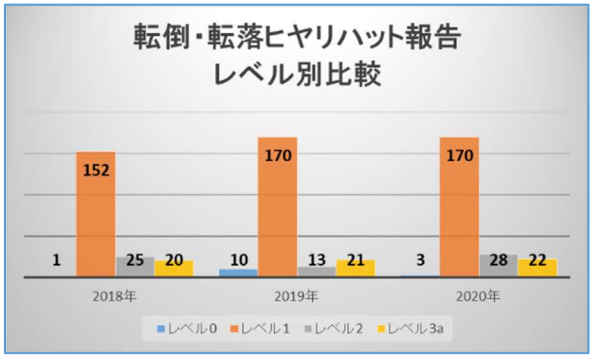


図 2　ヒヤリハット報告　レベル別比

2）今後の展望

事故防止対策マニュアル（転倒・転落）が作成から 10 年以上経過し、転倒・転落予防や振り返りに積極的な活用ができるよう内容の見直しを行った。その中で、患者に向けて「転倒・転落事故予防のためのご協力とお願い」を改訂し、入院時オリエンテーションにも活用できるものとした。

緩和ケア病棟では自尊心を尊重し、患者の希望を優先するため離床センサーなどを付けるタイミングを考慮するため、転倒・転落事例が多い。離床 CATCHⅢ、赤外線センサーの活用も今後検討していくとともに転倒しても外傷など影響が少なくできるよう工夫していく。また、医療機関外の各種専門機関、各種メディア報道、研究報告など幅広く情報を収集し委員への情報提供を行う。

（三井　淑子）

指差し呼称委員会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

委員長（看護師長）1 名、各部署代表スタッフ 1 名（地域連携室を除く）18 部署

2. 1 年間の活動と今後の展望

指差し呼称委員会は医療事故ならびにヒヤリハットを防止するための指差し呼称の意識向上とその徹底を目的に設置されている。2020 年度は各部署で特有の場面を想定し、KYT 勉強会を実施し、事例や意見交換内容を発表することで、KYT の重要性を認識し、リスク感性を高めることにつながった。また、チェックリストの書式、評価方法の統一を図った。各委員が現状把握し、問題解決する経過を共有することができた。毎年実施している指差し呼称意識調査では調査項目を変更し、指差し呼称を実施して「間違いに気づいたことはあるか」「予防できたインシデント経験はあるか」「指差し呼称を省くことはあるか、理由は」など実体験を尋ねた。約半数が指差し呼称を省くことがあり、その理由として「時間がかかること」をあげていた。

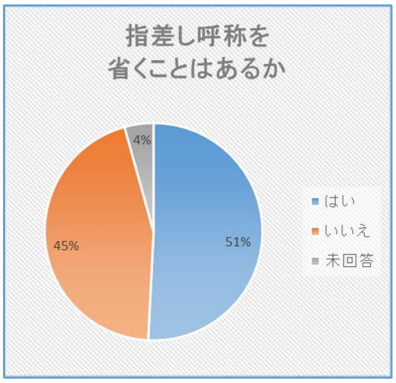


図 1　指差し呼称を省くことはあるか

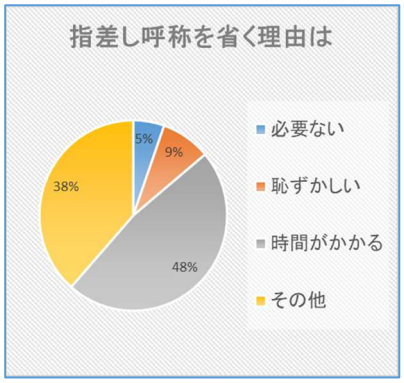


図 2　指差し呼称を省く理由

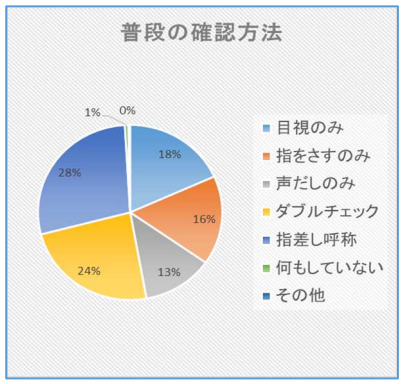


図 3　普段の確認

院内研修の中でダブルチェック、指差し呼称の場面や方法は状況に応じてその方法を判断する必要性を伝えた。今後、各部署で確実に指差し呼称できるよう検討する必要がある。総合評価としては指差し呼称関連のヒヤリハットは前年度 66.6%から 66.1%とわずかだが、減少したことより活動の成果はみられている。次年度は指差し呼称の実践指導を継続すると共に、指差し呼称の実際がスタッフに伝わるような動画の作成に取り組む。

（三井　淑子）

院内感染対策委員会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

病院長、副院長（感染対策医）、看護部長、事務長、感染対策看護師、薬剤師、検査技師、総務課

2. 1年間の活動と今後の展望

月１回、委員会を開催していますが、迅速な対応、提案を行うためにイントラネットを活用してコロナウイルス感染症に対する体制を構築しました。また従来の週１回の院内巡視に加え、コロナ対策として各部署の感染対策の巡視を追加しました。業務としては

1） 細菌　　院内で検出された細菌の種類、耐性菌の動向についてサーベイランスを行い、抗菌薬の感受性を院内共有ファイルからいつでも供覧できるようにしています。医療関連感染とくにCVカテーテルと尿留置カテーテルに伴う感染症(CRBSIとCAUTI)については検体数から毎月件数を計上していますが今年度からSSIについてもサーベイランスを開始しました。

2) 抗菌薬適正使用　　使用する際には菌の同定ができているか、適切に臓器感染症の診断ステップを踏んでいるかなどをその都度確認するように促しています。菌血症が疑われる場合にはいつでも２セット（４本）の血液培養をとれる体制です。各部署に JAID/JSC 感染症ガイド、医療介護施設関連肺炎、市中、院内肺炎ガイドライン、呼吸器学会より 2017 年成人肺炎ガイドライン簡易版を配布。抗微生物薬の適正使用指針を各診察室に常備。カルバペネム系、抗MRSA薬のバンコマイシン、テイコプラニン、ハベカシンとゾシンは届出制で、ザイボックス、キュビシン及び抗 CDI 薬フィダキソマイシンは許可制です。薬剤師が TDM を作成し適量投与と血中濃度による修正を行っています。抗菌薬の使用状況についても把握し偏りがある場合は医局会などで伝達しています。西部地区で耐性菌や抗菌薬使用状況について情報交換を行っています。

3) その他の感染症　　今年度 2 月からは新型コロナウイルスの流行により、発熱者の動線分離、外来ゾーニング、PPEの実習実施、マニュアルの整備、検査体制の構築、疑い患者の検査、隔離を順次整備しました。今年度から職員食堂を廃止し発熱外来を設置し発熱者の動線を完全に分離しました。検査は当初は保健所依頼、その後抗原キットと併用でPCR判明までは隔離の態勢でしたが 3 月に抗原定量と PCR 検査機器を導入しました。当院ではがん患者、ハイリスク患者の診療を継続するべくウイルス感染症の侵入防御を行いながら安全に診療ができるように日々努力しています。

4) 教育　　各病棟に ICN とリハビリにもリンクスタッフを新設し、対策の徹底や啓蒙活動を行っています。年２回、職員全員を対象に院内教育を行っています。

5) 院内感染対策マニュアル　国立病院機構の病院感染対策マニュアル2020年3月増補版を参考にマニュアルを一新しました。新型コロナウイルス感染症に対するマニュアルをイ

ントラネット、電子カルテ内で表示していますがマニュアルにまとめて編集しています。

6) 資材の工夫　　酒精綿はディスポ製品の導入を数年前にしていましたが、さらに消毒スティックや輸液、注射キット製品の導入などリスクの減少と包交車の廃止をめざしています。リキャップ防止対策としてプラスチック針を導入しました。新型コロナウイルス感染症の対応で PPE 再利用についてマニュアルを整備。院内備蓄を管理、報告体制を整えました。

7) 感染対策加算　　当院は加算 2 を申請し福岡大学病院等と連携し医療感染対策の向上を図っています。感染対策カンファレンスに定期的に参加しています。手指消毒薬消費量を毎月カウントし部署へ報告が開始され啓蒙されるようになり使用量が増加しています。

（柴田 隆夫）

院内教育委員会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

医師 1名　看護部 1名　臨床検査技師 1名　臨床工学技士 1名　事務部 1名

2. 1年間の活動と今後の展望

教育委員会の役割は、研修を通して、信頼される医療の提供、質の向上はもとより、全職員の職場環境を改善しより健康的に業務が行えるように支援することにあります。毎月1回定例会を開催していますが、活動内容は1)研修に必要な物品購入の検討、2)　研修報告の受理、重要な案件の院内への周知、3) 研修の企画、実行、4) 院内の各委員会に依頼して行う研修の計画作成などです。医療安全、救急や感染対策など病院機能に必須の項目を含め幅広く研修を計画しています。今年度はコロナ感染対策のため、動画や資料配布が主体でしたが感染対策、ACLS は部署毎に実習をおこないました。研修に参加できなかった職員のために、とくに感染、医療安全など重要な項目についての周知を図るため、研修のビデオ撮影を行い、後日閲覧するようにしています。救急蘇生、感染対策の充実のために実習用の人形、手洗いチェック用蛍光灯を購入し各部署で実習を行い診療レベルの維持を図っています。従来必要ながら項目に入っていなかったハラスメント、個人情報についても研修に取り入れました。必修項目として関連法規については各部署で周知を図るように企画しました。

（柴田 隆夫）

月	テーマ	概要	担当	参加数
4	コロナ感染対策	実習	感染対策	40
5	コロナ感染対策	動画学習	感染対策	全職員
6	ACLS	実習	救急	22
7	ハラスメント	資料配布	サービス向上	329
8	災害対策	動画学習	災害対策チーム	363
9	リスクマネジメント	資料配布	医療安全	383
10	臨床倫理	意思決定支援	倫理委員会	394
11	高齢者評価	資料配布	循環器医師	332
	消防訓練	資料配布	災害対策チーム	345
12	接遇	資料配布	医療安全	373
1	感染対策	資料配布	感染対策	302
2	安全確認、被爆対策	動画学習	医療安全	340
	注射用カリウム	資料配布	医療安全	169
3	TQM 活動	動画視聴	サービス向上	全職員

サービス向上委員会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

事務部長、医事課長、総務課長、通所リハビリテーション所長、看護主任、
看護主任、看護師、放射線技師

2. 1年間の活動と今後の展望

毎年取り組んでおります外来患者満足度調査は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して実施を見送らせて頂きました。投書箱を通じた激励やお叱りなど様々なご意見は、患者サービスに取り組む機会となっています。頂いたご意見より、今年度は、一部の有料個室でWi－Fi環境を整備いたしました。

サービス向上に関する新たな取り組みとしてTotal Quality Management（TQM）活動を開始し、当委員会がこの推進とサポートを担いました。当院のTQM活動は6月～12月の活動期間を経て、翌年2月の発表大会を1クールとしています。今年度は、11サークルが様々なテーマで活動し、発表大会を1ヶ月間のポスター掲示後の投票形式として開催しました。地域の掛かりつけ医療機関として、患者様方から選ばれる病院であり続けることを目標として、今後も活動を継続して参ります。

（北野 晃祐）

※2020年度TQM活動発表大会結果は別途掲載

NST 兼栄養管理委員会

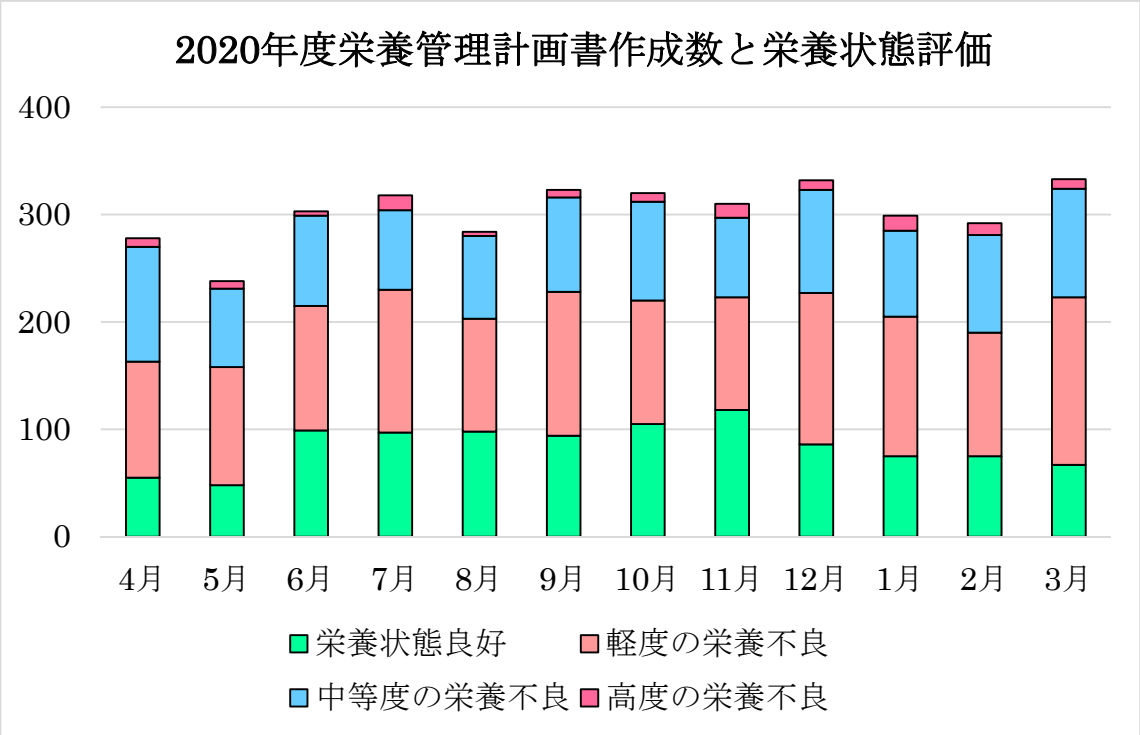
1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名、管理栄養士 2 名、栄養士 1 名

看護師 6 名、言語療法士 1 名、薬剤師 1 名

2. 臨床実績



3. 1 年間の活動と今後の展望

活動内容：NST 回診及び検討会（毎週木曜日）

栄養管理委員会（第 3 木曜日）

栄養管理はすべての疾患の治療に共通する最も基本的な医療であり、適切な栄養管理がなされなければ、いかなる治療もその効力を失い、大きなリスクとなると言われています。

NST (Nutrition Support Team)の介入は、複数の職種がお互いの知識を持ち寄り、チーム医療を行うことにより最善の治療につなげることが目的となります。

当院では急性期疾患はもちろんのこと、高齢者、嚥下困難、認知症、神経疾患、糖尿病、腎不全（人工透析を含む)、終末期などの様々な患者さんがおられます。栄養評価を行い、様々な視点から問題点を早期に発見し、情報を共有して、対策を見出すことにより、患者さん・ご家族の不安の軽減、症状緩和や褥瘡の発生を防止、早期退院や社会復帰を助けることを目指していきたいと思っております。

（吉田 亮子）

褥瘡対策委員会

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

褥瘡対策委専任医師　司城博志

皮膚排泄ケア認定看護師１名

専任看護師　１名　各部署主任　栄養士　理学療法士

2. 臨床実績

入院患者数	2251 人	
褥瘡院内発生数	38 人	
院外発生数（入院時褥瘡形成あり）	92 人	計 130 人中　治癒 24 名/年
褥瘡発生率	約 1.68%	

3. 1 年間の活動と今後の展望

毎月、第１・第 3 木曜日の午後から全部署の褥瘡保有者の回診を行っています。ほとんどの患者様が真皮までの欠損でありドレッシング材の保護で悪化防止が出来ています。皮下組織を超える褥瘡保有者の入院時には形成外科と連携を図り処置方法を相談しケアを行っています。回診時には、理学療法士からポジショニングの指導や栄養士からは現在の食事摂取状況や栄養管理の状態、NST 回診の情報を共有しながら、治癒促進への支援を行っています。

皮膚排泄ケア認定看護師のケア介入から 2 年目となり、褥瘡処置方法、ドレッシング材や軟膏類の選択の統一が出来るようになりました。褥瘡委員会の際に難治ケースや処置方法の勉強会を行い、褥瘡対策マニュアルの改訂を行いました。各部署の主任が専任看護師としての役割を認識し活動できるようになりました。今後も各部署の専任看護師通しが情報交換を密に行い、継続したケアと褥瘡発生予防に努めていきます。また、高齢の患者様には皮膚が脆弱な方が多くいらっしゃいます。少しの刺激が皮膚損傷に繋がる為、褥瘡以外にもスキンテア保有者へのケアも行っていき、発生防止を目指します。

（高田 真弓）

認知症ケアチーム

1. スタッフ紹介

【構成メンバー】

医師　1名　　看護師　8名　　介護支援専門員　1名

作業療法士　1名　　薬剤師　1名　　ＭＳＷ　1名　　診療情報管理士　1名

2. 臨床実績

認知症ケア加算Ⅱ・・・算定患者数月平均 48 名（月平均 371,091 円）

認知症巡視・・・・・・年間延べ 35 名

臨時せん妄患者対応・・・・8 名（11 月より開始）

3. 1 年間の活動

1）病棟巡回

病棟から依頼があった患者に対し第 1・3 水曜日 14：30～病棟巡回を行っている。

巡回のメンバーは医師、看護師、リハビリ、薬剤師で主に夜間せん妄、昼夜逆転、大声を出す、帰宅願望などの症状の患者に対し薬剤の調整、院内デイケアの促し今後の方針などを検討していった。

入院して環境の変化の為せん妄になる患者も多く、病棟が困っている事例が多かったため、11 月より定期巡回以外にタイムリーに対応できるようせん妄回診を開始した。

2）マニュアル改訂

2016 年度に作成した認知症マニュアルの見直し、修正を行った。

3）研修

院内研修は、山田Ｄｒの講師にて 8 月 18 日に「せん妄について」を行った。

集合研修と動画研修にて 328 名の参加であった。スライドがわかりやすく認知症とせん妄の違いが分かった、薬物療法について整理ができたと満足できたという意見が多かった。

4）院内デイケア

コロナ禍にて一時中止していたが、10 月から再開始した。午後の 1 時間半、2 病棟ずつ 10 名までとし、マスクや手指消毒など感染予防を徹底して行っている。

中止時期にはベット臥床がちの患者が多くみられたが、再開することで昼夜逆転の予防、ＱＯＬの向上に効果が出ている。

4. 今後の展望

1 年間コロナ禍で思うように活動ができなかった。院内デイケアの中止の期間、ベット臥床の患者が増加したことからも院内デイケアの必要性を実感することができた。今後は、病棟巡視の充実、認知症ケアコースを立ち上げ認知症ケアの質の向上に努めていきたいと思う。

（江口　敦美）

地域振興委員会

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

放射線技師　１名　臨床工学技士　１名　理学療法士　１名　臨床検査技師　１名
看護師　１名　介護福祉士　１名　視能訓練士　１名

2. 1 年間の活動と今後の展望

病院 35 周年記念行事を契機として、「地域振興委員会」は継続した地域貢献活動を実施することを目的として 2018 年 7 月に発足いたしました。2019 年度は、壱岐南小学校 4～6 年生を対象とした職場体験を企画・実施しました。2020 年度はコロナ禍ということもあり、訪問による職場体験が難しい状況でした。そこで、当委員会として、地域住民のみなさまに対して、何か出来ないかと考え、当院が行っているコロナ対策を動画で撮影し、見ている人が分かりやすいように、テロップを付けて編集しました。その動画をホームページに載せることにより、当院を受診するか迷っている地域住民のみなさまに対して、少しでも安心して
来院出来るように情報を開示しました。

また、「ふれあい看護体験」と呼ばれる、県内の医療系の仕事に興味を持っている、高校生を対象にした、病院で働いている看護師やコメデカルの職員の働いている様子を実際に見てもらうというイベントがあります。今年は、学生の訪問が難しい為、zoom を使ってオンライン上で行いました。そこで、当委員会では、各科の仕事内容の紹介を動画で撮影し、テッロプを付けて、分かりやすくなるように編集しました。それをオンラインで動画を流して学生達に見てもらいました。

地域振興委員会は、今はコロナ禍ということもあり、ほとんど地域住民の皆さまと対面で触れ合うことが出来ませんが、落ち着いたら、地域住民の皆様と色々な形で交流を持てるイベントを考えて行きたいなと思っています。そして、地域全体を一緒に盛り上げていける存在になれるよう、これからも活動していきたいと考えています。

（塚園 慎也）

サービス付き高齢者向け住宅かりん

（訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん）

1. スタッフ紹介（2021 年 3 月 31 日現在）

施設長　１名　事務　１名

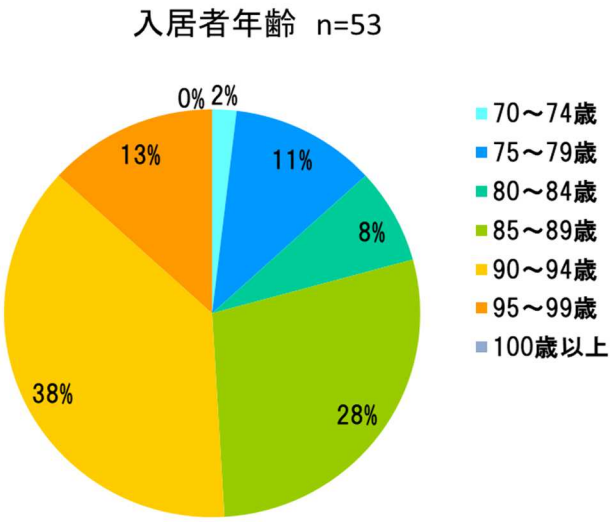
訪問介護：サ責１名　介護福祉１０名　ヘルパー２名　看護師２名　准看護師２名

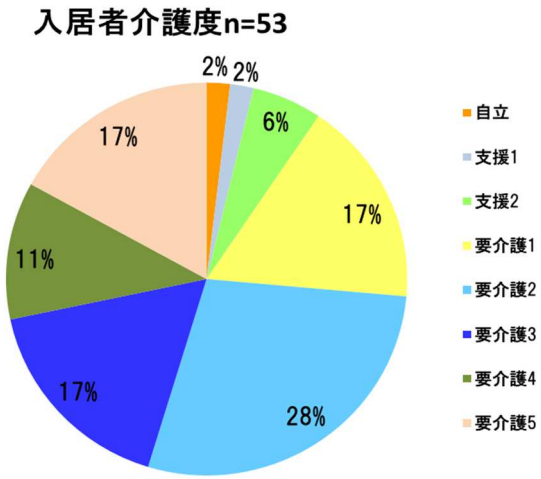
通所介護：主任１名　介護福祉３名　ヘルパー１名　無資格１．３名

2. 実 績

	サ高住	通所介護	訪問介護			
	入居者数	利用者数	死亡数	男	女	疾患名
4 月	50 名	50 名	2 名		2 名	パーキンソン・老衰
5 月	53 名	47 名	1 名		1 名	老衰
6 月	51 名	49 名	1 名		1 名	肝癌
7 月	53 名	52 名				
8 月	53 名	48 名				
9 月	53 名	47 名	1 名		1 名	肺炎
10 月	47 名	45 名	1 名		1 名	老衰
11 月	52 名	44 名	1 名		1 名	老衰
12 月	51 名	44 名	3 名	1 名	2 名	パーキンソン・老衰・心不全
1 月	50 名	42 名	2 名		2 名	パーキンソン・多系統萎縮症
2 月	52 名	44 名	1 名		1 名	急性骨髄性白血病
3 月	52 名	46 名	2 名	1 名	1 名	ＡＳＯ・パーキンソン
平均	51 名	46.5 名	合計 15 名	2 名	13 名	

＊全員「かりん」の居室にての看取り





3. １年間の活動と今後の展望

使命：高齢者の方々が世代を超えて地域の人々や子供たちと共に暮らしていける社会。
最期まで地域社会の一員として誇らしく暮らしていける街づくりをしていきます。

理念：入居者に最期まで誇らしく、そして安心できるくらしの提供をしていきます。

１）サービス付き高齢者向け住宅かりん

①安定した経営

・事業収支 1,750 万円/月目標⇒1,810 万円/月で目標達成できた。今年度は新型コロナウイルス感染対策で年末年始にかけて入居者を予防の為入院・長期入院の方が後期４名程おられたため１月２月は目標達成できなかった。

②自己・部署も質のいい仕事を遂行し誇りを持つ

（立ち位置を知りなすべき事を行う）

・ＴＱＭ活動　⇒①時間外勤務を減らす事から、１）業務改善（記録の見直し・デイではパソコン直接入力）２）急変時以外は定められた時間内に仕事終了する習慣の定着デイの時間外管理を友岡主任に委譲した事により、時間外減少・デイの中で仕事テキパキ行う姿勢・友岡主任が管理に目が向くようになり、全体としていい効果が得られた。

２）訪問介護事業所かりん　コンセプト：自立に向け１ケア・１リハビリ・１ギフト

①認知症の勉強会を行いチームとして関わっていく

・２名の入居者に、渡辺・大森を中心として、デイ・訪問介護・ＲＨとチームで関り事例をまとめ、３/１４クローバープラザ「第１９回介護福祉学会」にて、渡邊みなみが「認知症入居者にチームとして関わる」発表　認知症を多く抱える施設としては、チーム全体で関わっていく事の大切さを学び、今後も実践していこうと思う。

３）通所介護事業所かりん　　コンセプト：心・体・頭を元気にする

①人材育成（それぞれに役割を持たせ成長していく）

・デイサービス職員にそれぞれ①くもん（育成と事例発表）②レクレーション（畑での野菜作り～漬物・音楽体操等）等の役割を持たせ自主運営，ＨＤ何よりもＴＱＭ活動中心として業務改善を通して、時間外勤務権限移譲により、友岡主任が経営に目が向き、また、デイサービスの職員育成などに繋がった。

平成２５年８月に開設し、８年が過ぎようとしています。何もわからない中、スタッフも初めての仲間で、とにかく「最期まで安心して普通の生活で暮らせ、看取りまで行う」事を目標に無我夢中で走ってきたように思います。幸い皆様のご協力のもと、今では、少しは地域に根差し、神経難病（ＡＬＳ等）以外は、スタッフの力も付き、看取りが出来る様になりました。そして、長い間の懸案事項であった、何か「かりん」の思いを短い言葉でスタッフに浸透できないかと思案し続けた結果「志高一心」という言葉に集約しました。これは、開設当時の志を忘れず、常に高い志をもって、１つ１つに心を込めて行いましょう。又心を込めての中には”人を慈しむ”の意味合いも含まれています。「かりん」の根幹を大切にしつつ、常に１つの所に留まることなく成長し続ける施設であろうと思っています。そして、今後は社会貢献を視野に入れ、みんなで頑張っていこうと思います。どうぞ、これからもご指導・ご協力お願いたします。

（野田　江美子）

業　績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名　称
脳神経内科				
新規パーキンソン病治療薬の使用方法について	山田　猛	2020 年 10 月 16 日	WEB	パーキンソン病の今後を語る会
在宅神経難病患者の総合支援体制について	菊池　仁志	2021 年 2 月 24 日	WEB	令和２年度　愛媛県難病専門研修会
健康増進・糖尿病センター				
糖尿病の経過中に悪性新生物が発見された症例の検討	吉田亮子、中川翠、永迫久裕、小野順子	2020 年 10 月 5 日 ～16 日		第 63 回 日本糖尿病学会年次学術集会
高齢者糖尿病患者のサルコペニアと大血管障害との関連	藤川太一、佐々木勝哉、森亜美佳、吉田亮子、小野順子	2020 年 10 月 16 日 ～17 日		第 58 回 日本糖尿病学会九州地方会
血液透析時に著明な高血糖に気づかれた認知機能低下緩徐進行1型糖尿病の一例	江崎俊介、牟田芳実、吉田亮子、村田敏晃、小野順子	2020 年 10 月 16 日 ～17 日		第 58 回 日本糖尿病学会九州地方会
後期高齢者糖尿病患者における持効型GLP-1受容体作動薬の使用例の検討	牟田芳実、江崎俊介、吉田亮子、藤山真由美、三島栄子、河野真紀、濱端姿子、平石繁美、江口敦美、小野順子	2020 年 10 月 16 日 ～17 日		第 58 回 日本糖尿病学会九州地方会
血液透析時に著明な高血糖に気づかれた認知機能低下緩徐進行1型糖尿病の一例	江崎俊介、牟田芳実、吉田亮子、村田敏晃、小野順子	2020 年 9 月 15 日		第 509 回福岡市糖尿病アーベント
リハビリテーション科				
高齢糖尿病患者のサルコペニアと大血管障害との関連	藤川太一、森亜美佳、佐々木勝哉、吉田亮子、小野順子	2020 年 10 月 16～17 日	WEB	第 58 回 日本糖尿病学会 九州地方会
パーキンソン病患者のステップ運動における視覚的手がかりの有無が、歩き始めに及ぼす影響	髙塚翔太郎	2020 年 2 月 22～24 日	福岡	第 14 回 パーキンソン病・運動障害疾患コングレス

業　績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名　称
リハビリテーション科				
パーキンソン病患者の呼吸機能と胸郭および腹部可動性の関連について～呼吸運動評価スケールを用いての検討～	古川晃大、入木紗也可、森亜美佳、髙塚翔太郎、藤川太一、佐々木勝哉、山本匡北野晃祐	2020 年 2 月 22～24 日	福岡	第 14 回 パーキンソン病・運動障害疾患コングレス
パーキンソン病患者の前頭葉機能低下が構音･発声･嚥下訓練の効果に与える影響	木村一喜、岡村美里、齋藤正直、中倉梨香、岡久美、北野晃祐、菊池仁志	2020 年 2 月 22～24 日	福岡	第 14 回 パーキンソン病・運動障害疾患コングレス
Relationship between anxiety of falling and motor function in Parkinson's disease patients during daily activities	山口良樹、北野晃祐、井上賢一、藤岡伸助		学会誌 のみ発行	World congress on Parkinson's disease and Related disorders 2020

業　績

論文・著書等

論文・著書名	共著・共同研究者	発表誌 出版社	巻（号）頁	年号
脳神経内科				
Differences between predictive factors for early neurological deterioration due to hemorrhagic and ischemic insults following intravenous recombinant tissue plasminogen activator	Tanaka K, Matsumoto S, Furuta K, Yamada T, Nagano S, Takase KI, Hatano T, Yamasaki R, Kira J	J Thromb Thrombolysis	49: 545-550	2020
Reduced post-ischemic brain injury in transient receptor potential vanilloid 4 knockout mice	Tanaka K, Matsumoto S, Yamada T, Yamasaki R, Suzuki M, Kido MA, Kira J	Front Neurosci	14: 453	2020
Modified diffusion-weighted imaging-Alberta Stroke Program Early Computed Tomography Score including deep white matter lesions predicts symptomatic intracerebral hemorrhage following intravenous thrombolysis	Tanaka K, Matsumoto S, Furuta K, Yamada T, Nagano S, Takase KI, Hatano T, Yamasaki R, Kira J	J Thromb Thrombolysis	50:174-180	2020
リハビリテーション科				
小脳疾患患者の運動失調に対する理学療法アプローチ	古川晃大	理学療法 37(11)	1002-1012	2020
パーキンソン病のリハビリテーション～言語聴覚療法の実践報告～	木村一喜	難病と在宅ケア 26(7)	P48-53	2020
科褥瘡対策委員会				
看護の現場ですぐ役に立つスキンケアの基本 褥瘡ケアの基本	皮膚・排泄ケア認定看護師　梶西みちこ	秀和システム		2020

サービス向上委員会

2020 年度ＴＱＭ活動発表大会結果

賞	サークル名	部署	活動テーマ
最優秀賞	返戻の A・RA・SHI～減らしていくたい！～	医事課	返戻再請求を削減
優秀賞	把握の天使	３階病棟	ＡＤＬの把握（棟内移動）
優秀賞	あつまれ断捨離ナース	外来	デッドストックをなくし、SPD 棚を使いやすくしよう！
奨励賞	SMILE SUPPORT たい！！	通所リハビリテーション	業務の効率化（時間外の減少）

2020 年度　村上華林堂病院年報
発　　行：2021 年 11 月
編　　集：病院年報編集委員会
委 員 長：司城博志
委　　員：江口敦美
：北野晃祐
：久間伸彦
：西島勝也
：宮原美佐